

## 地の来歴

鳴津治夫

昭和四十六年の九月下旬である。

島村信一が、この利根川下流の佐原という町にある、県の総合地方事務所の農林課に勤めはじめてから半年あまりが過ぎていた。その半年で、この地域特産の早場米はおおむね収穫が終わり、病害虫防除を主な業務とする信一の仕事も一段落<sup>と</sup>というところだった。

この年は、六月にイネドロオイムシという害虫が一部で異常発生したが、その他の病害虫は心配されたいもち病やウンカの大発生もなく、稲の収穫はまずまずのできであった。ただ、夏の天気が良かった分、畑作物にはハダニやヨトウムシの発生がところどころで目立っていた。

下旬に苗を定植し、秋の彼岸の頃から収穫がはじまる。信一はまだ入りたての六月頃、伊藤係長と畑の巡回をしている時、サツマイモの葉が折られたまられたようになってつづられている株について、これはイモコガという蛾の幼虫の被害だと教えられたのを思い出した。雨が降らずに早ばつ気味だとイモコガの発生が多くなると伊藤係長は言った。関東ローム層のこの地帯は夏場の雨が少なく、サツマイモはそうした早ばつに強い作物であったが。

大柴町の農家へ行くと、さつそく家の裏の畑に案内された。伊藤係長は、「やあ、しばらく」と言っただけだった。農家の主人は、サツマイモをひと株ぬきとると、イモについた泥を手ではらって、「これはコガネムシの幼虫になめられたあとだと思おう」と言った。サツマイモの赤紫色の肌のあちこちに灰白色のかじられたような痕があった。主人は、「前から少しはこうしたものがあったが、気にするほどではなかった。それが今年はそのごく沢山やられてしまった。これでは売り物にならない」とも言った。

そして「今年からデイルドリンが使えなくなったから、さつそくコガネムシが増えたんかのう」と言った。

この農家はいわゆる篤農家だった。それだけにいろいろ勉強をしていた。かつては村の4日クラブ<sup>※</sup>でも活動し

※4日クラブは、元はアメリカのよりよい農村、農業を創るために活動している組織。Head(頭)、Heart(心)、Hands(手)、Health(健康)の4つの頭文字で、日本では、全国青年農業者クラブ連絡協議会(全協)を主体とした組織。

農作物の被害の情報はいつも突然やってくる。

香取郡の西部にある大柴町の農協から、「サツマイモのイモにひどくかじられた痕がある」という電話がかかってきたのは秋の彼岸の過ぎた頃であった。大柴町周辺の畑地帯ではかつては「でんぶん用甘しょ」を作っていた。それが最近の消費者ニーズの変化からおいしい「食用甘しょ」を作るようになり、それがよく売れたので、広大な畑はどこもかしこもサツマイモ畑となっていた。

信一は上司である伊藤係長と現場に向かった。その現場の市川という農家の主人は伊藤係長と農学校で一緒だったと言う。

食用甘しょはいわゆる「金時」系のサツマイモで、五月

ていた人だ。社会の動きにも敏感で、この地域のサツマイモを「でんぶん用甘しょ」から「食用甘しょ」へ切りかえる先陣をきった人でもあった。この年(昭和四十六年)農薬の残留毒性が問題となって「農薬取締法」の大改正が行われたこともよく知っていた。

畑でサツマイモの株を調べる。株元の方に何匹かの小さなコガネムシがいた。体長一センチに満たない赤褐色の虫。アカビロードコガネの成虫である。畝からサツマイモの株をぬいて調べてみる。大きなイモの表面に、小指の幅よりもせまい食害痕がいく筋もついている。薄くかじっている感じだ。そして掘りとった株のあった土を調べてみると、やはりいた。体調一センチくらいの小さなコガネムシの幼虫だった。乳白色の体に褐色の頭部、これがアカビロードコガネの幼虫だった。

「デイルドリンが使えなくなったんで、ダイアジノンくらいしかないかなあ」市川さんの家の土間で机を囲んで座って伊藤係長は言う。

「なるべく農薬は使わない方がいいんだがなあ。それで市ちゃん、おたくの畑で、コガネムシの幼虫の調査をさせてもらいたいんだが、いいだろうか」

その調査は、サツマイモ畑を何カ所か一定面積掘って、その中にいるコガネムシ幼虫の数と生育ステージを来年に

むけて調べるといふものだった。全体的には、いつ成虫と  
なつてサツマイモの株に飛んできて、幼虫がいつ頃からイ  
モを食害し、その幼虫は冬をどのよう<sup>さま</sup>に過<sup>さま</sup>ごして、いつ頃  
蛹になるのか。そしてそれらの中から被害を少なくする防  
除対策を考えようというものだった。

その調査を好意的に了解され、信一はこれから月に一回、  
サツマイモ畑の土の中を調べることにした。

「ところで、この間はたいへんな騒ぎだったね」

伊藤係長は、この大栄町のすぐ隣の、成田市三里塚での  
空港反対運動の騒動のことを話題にした。それはついこの  
間の九月十六日、空港用地の行政代執行に反対して反対派  
と警察の機動隊が衝突し、多数の負傷者、逮捕者とともに、  
警察官三人が死亡（殉職）したのだった。

「オレなんか、もし土地がひっかかっていたら、絶対に  
渡さないな」と市川さんは言った。その三里塚の地区には  
もとの御料牧場があり、周辺の農家はほとんどが戦後開拓  
の人たちだった。特に、満蒙開拓団で引きあげてきた人た  
ちが多かった。戦後二十余年、ようやく軌道にのつてきた  
農業への、国からの無理解とも言える突然の通告だった。

「警察官が死んだのは不幸なことだったな。それにしても、  
つかまつたのはほとんど青年行動隊の連中だといっている。  
おやじの背中を見て育つた若い衆がおこるのはあたり前だ  
が」と市川さんは顔をしかめて言った。

## 二

信一は小さなスコップをもつて畑の土を掘っている。十  
月にはいつて第一回目のコガネムシの幼虫の生息状況調査  
である。広大な下総台地の一角、五十センチ四方の調査区  
を三カ所とり、それぞれ深さ十センチ、二十センチ、三十  
センチまでのコガネムシ幼虫の生息数と生育ステージを調  
べていく。

大きな秋の空が広がっていた。下総台地のこのあたりは、  
本当にどこまでも平らであった。ところどころに台地の浸  
食された谷津があり、そこは杉の木が植林されていて、そ  
の下は細長い谷津田であった。

信一は、伊藤係長が時々話す風土記の説話を思い出した。  
六月のイネドロオイムシの大発生時は「夜<sup>や</sup>の神」とい  
う一種の「蛇神」の話であったが、畑の土を四角く掘って  
いる今はどうしても「土蜘蛛」の話を思い出す。あるいは  
それは「国栖<sup>くわ</sup>」や「佐伯」と呼ばれていた人々のことだ。  
「常陸国風土記」にはそうした人々が土を掘った穴の中に  
住んでいたとある。

「茨城の郡一古老が言うには、昔、国栖、山の佐伯、野の  
佐伯があった。いたるところに土の穴倉を掘って、いつも  
穴の中に住んでいた。誰からも手なずけられることがな  
のだった。

第一回目の調査を終わって、信一は市川さんの土間で話  
をする。市川さんは信一に、有機農業とか無農薬栽培のこ  
とを聞いてくる。そして、自分ではできるだけ農業を使わな  
い農業をやっていきたいと話す。信一はそれに対してまだ  
自信をもつた答えはできない。もちろん農業を減らしてい  
くことは必要である。それと、経済活動としての農業生産  
とのかねあいをどうとっていくか。

「空港反対同盟の連中は、その無農薬栽培をはじめている。  
学生たちがそうした考えをもちこんできたらしい」と市川  
さんは言った。信一は、そうなのか、自分もこうした問題  
に対応しなければならぬ状況の中にいるのかと思うのだ  
った。

十月の十、十一、十二日の三日間、佐原の町では秋の大  
祭が行われた。

佐原の大祭は、夏の七月と、秋の十月の二回の大祭があ  
った。小野川という町中を流れる小河川を境にして、東側  
を本宿、西側を新宿と呼んでいた。本宿は中世からつづく  
元々の町場で、八坂神社（スサノヲノミコト）の祭りだっ  
た。これが七月の夏祭りの方で、一方の新宿は天正年間に  
できた町で、こちらは諏訪神社（タケミナカタ）の秋祭り  
であった。

く、世間一般から遠ざかっていた。この時、大臣<sup>おほのみか</sup>の同族の  
黒坂の命が、彼らが外に出ている間に茨を穴の内側に仕か  
け、ただちに騎馬をかけて追いつめ、佐伯は穴に逃げ帰り、  
そこで茨に刺さって死んだ。これにより茨城の郡と言う、  
「云々」

これは「ヤマト朝廷」の東方侵略の風景であるだろう。  
このようにして利根川沿いの地域は政治権力のローラーの  
下にはいつていった。その名目は地域の開発、そして皇化  
の恩恵を与えること、そしてその時期は四世紀から五世紀  
にかけてであると言われている。

信一は小さなスコップで土を掘り下げながら、そこにコ  
ガネムシの幼虫がいないかどうか慎重に調べていく。アカ  
ビロードコガネは、昆虫図鑑によると、六月に成虫が出て  
きて、七月に幼虫となり、その幼虫は草や木の根っこなど  
を食べて生長し、翌年の四月から五月に蛹になる。その生  
育ステージとか密度とかが、実際のサツマイモ畑ではどの  
ようになっているのかを調べて、被害の防除対策につなげ  
ようとしている。

総合防除、あるいは生態的防除、という考え方が新たに  
大きく出てきていた。農薬一辺倒だった病害虫防除対策の  
反省に立って、天敵の利用や栽培方法の工夫によって病害  
虫の被害を最小限におさえようとするものだ。そのための  
基礎的データとして、コガネムシの幼虫の調査は必要なも

この祭りの出しものは、豪壮な山車と不思議な音調の佐原囃子であった。山車には町内ごとに工夫をこらした美しくも写実的な山車人形（それは神武天皇や経津主命や日本武尊などであった）が高々とそびえ、その山車には笛や太鼓の下座連が乗りこんで町内をねり歩いた。

そして佐原囃子である。この佐原囃子のルーツは、地域の歴史をまとめた本によると、川向こうの茨城県の大杉神社に伝わる「あんば囃子」にあるという。それはまた「世直し囃子」とも言われるが、その実像は疫病退散の悪魔祓いの囃子なのだという。

信一はそういった本を読みながら、川向こうの霞ヶ浦沿岸にあったという「まほろば」の国のことから、ヤマト朝廷の東方侵略によって敗れ去った者、不本意ながら恭順した者たちのことを思うのだった。そしてそういった者たちを内部に抱えこんでいく「歴史」というものをこの祭りの囃子の音色の中に思うのだった。

つまり、夏祭りのスサノヲも、秋祭りのタケミナカタも、それはどちらも敗れた方の神であった。そして侵略側の神フツシを祀る香取神宮のおひざもとで、このような敗者の神の大祭が年二回行われているのだった。

歴史とは勝ったものの歴史であるによく言われるが、敗けたものも、どっこいしぶとく生きつづけているのだ。今、佐原の町には、そんな思いもこめて、秋祭りの笛の音が流

布事業の全体的計画ができあがるのだ。

その頃はまた、公害とか環境への関心が高まってきた時代でもあった。

十一月下旬のある午後、信一は伊藤係長と一緒に谷津田を流れる小川に沿って歩いてきた。いつもの病害虫調査ではなく、言ってみれば一種の環境調査であった。

佐原の町には、県の出先機関として総合地方事務所のほかに、保健所や土木事務所、それに土地改良事務所というものがあった。中でも土地改良事務所は、農地の改良を中心とした仕事で、信一たちの農業生産振興のベースを形作っていた。そして、かつてさつば舟で行き来した水郷の湿地地帯を、整然と区画整理された美田にかえたのもこの土地改良事業の仕事だった。

その土地改良事務所から、「鮭の生息調査」を頼まれたと言って伊藤係長が信一にも来るようにと言った。二人は事務所の軽自動車に乗って、佐原からは南へ三十分ほど走ったところにある多古町の水田へと向かった。

香取郡は、佐原の町が扇の要のような位置にあって、一市九町で構成されていた。そして北は利根川沿いの水田地帯で、南は標高四十メートル前後の下総台地であったが、その下総台地からは、北の利根川へ向けてと、南の九十九里浜に向けてと、二方向に小河川が流れていた。

れていた。

### 三

十一月になった。

信一の仕事は稲作の生産対策が中心だったから、九月の収穫までが気のぬけない期間であった。それに対して、秋からは少し余裕がもてるようになった。半年が過ぎて、職場にも、社会人としての生活にもなれてきたのかも知れなかった。

と言ってもこの時期、特に今年においてはそうはいかないようだった。それは農業取締法が改正されて、有機塩素系農薬の使用禁止などが行われたため、農薬販売業者を巡回して、使用禁止農薬の在庫確認と、その安全な廃棄を指導する業務が加わったことによるのであった。

そして、十一月は稲作にとってはいわゆる農閑期であったが、この時期はまた、来年の稲作の空中散布事業の計画をとりまとめる期間でもあった。各町ごとに農家の希望をとり、各町ごとに散布面積、散布時期、対象害虫などの計画を出してもらおう。それを香取郡全体としてとりまとめ県に提出する。県は各郡からの計画をとりまとめ県としての計画を国に提出する。そして年あけに各県ごとにヘリコプターの配機計画の協議などをして、春には農業空中散

その分水嶺のような台地の尾根の森の中に、山倉大神という神社があった。この神社の祭神は、高皇産靈大神、建速須佐男大神、大国主大神、の三神である。そしてこの神社には「山倉の鮭祭り」というものが伝えられていた。

鮭は生まれた川に帰ってくるという。その鮭の帰ってくる川で南限となっているのは太平洋側では千葉県九十九里浜にそぐ栗山川である。栗山川は下総台地を水源として南に流れ、九十九里浜中央部の横芝光町で太平洋にそそいでいる。その栗山川の支流のひとつが山倉大神の森から流れ出ていた。

鮭祭りは、毎年十二月のはじめに、奉納された鮭を塩漬けにして、小さい切身にさばいて参詣者に分け与えるという祭りなのであるが、最近はその鮭の遡上が少なくなってきた。栗山川本流にはそれなりの遡上が見られるのだが、山倉大神への川は栗山川へ注ぐ支流のまたその支流であり、さらにその流れこむ支流が最近の土地改良事業によりコンクリートの擁壁となったため、鮭がうまくのぼれなくなっているのではないか、「その辺のところを伊藤さん、第三者的に調べてみて、どうしたらいいか教えてくれないか」と土地改良の所長から頼まれたのだと伊藤係長は言った。

鮭の遡上は北海道では秋になると間もなくはじまるが、南へ行くにしたがって遅くなり、この南限の栗山川では十一月が最盛期であった。現場に着くと、その支流の少し

淵のようになったところに沢山の鮭が集まっていた。黒っぽい背びれがひしめいており、すでに産卵の赤い色も見えた。そして、淵からさらにその流れの上流へ行こうとするものと、その淵に横から流れおちる小さな流れの方へのほつていこうとするものがある、そこが溜り場のようになっていた。しかし山倉大神の方へ行く小流れは支流からほぼ直角に曲がってのぼらなければならず、そこがまたコンクリートで壁となつていられるためとてもほれそうになかった。

「こりゃあ、やっぱ無理だな。ここるところに魚道を作ってやらなくちゃ」と伊藤係長は言った。そして二人はその小流れを上流の方にたどって行った。幅のせまい谷津田だった。信一は、六月にイネドロオイムシが大発生した小見川町の谷津田によく似ていると思った。それは稲作がはじまる前からあった風景だ。

「鮭をとる文化というのは、アイヌの文化だけど、それはおそらく、縄文時代の文化でもあったと思うよ。このあたりは、縄文の遺跡も多いからね」と伊藤係長は言った。確かにこのあたりには大規模な貝塚が沢山あった。縄文時代は海面が高かったから台地の下まで海であったろう。その海の幸、山の幸、川の幸に恵まれて、縄文の人々の生活が営まれていた。そしてその人々は、地面に穴を掘って住んでいた。

た。特に農業には「毒物及び劇物取締法」の対象となる薬剤も多かったので、保健所の薬事監視員の人と一緒に管内を廻るのだった。

冬場のもうひとつの大きな仕事は、病害虫の発生予察としての害虫類の越冬調査であった。ウンカやヨコバイ類は幼虫の形であぜなどの草の下で越冬するものが多い。それを、噴霧器を逆にしたような吸引器（サクシオン・キャッチャーと言った）を背中にしよって、虫を吸いとり越冬量を調べるのだった。

また、ニカメイチュウは、稲わらの中で幼虫で越冬しているの、稲を刈りとって脱穀したあと「のう」に積んである稲わらの切り口を調べて歩いた。わらの切り口から幼虫の糞が出ているものがあると抜きとって持ち帰り、中にいる幼虫の体長や体重を計るのだった。しかし、機械で刈ることが増えてきたので、まず稲わらの「のう」を見つけてるのがひと仕事だった。信一はぼつちをかぶった稲わらの「のう」をさがして、あちらの田んぼ、こちらの田んぼを走り回った。

それらに加えて、ひとつはコガネムシの幼虫の生息状況調査が冬場も続けられた。畑の土を掘って幼虫の数を調べていく。寒くなると、幼虫はだんだんと地の深いところへもぐっていくのだった。

「あっ、いましたよ、一匹いました」

小流れを見ながら草の道を歩いていた信一は叫ぶように言った。まだ土水路のままのその小流れの、水草がゆれている流れの中に、大きな一匹の鮭がいた。上流に頭を向けてゆつくりと泳いでいた。色は大部あせて疲れているようだったが、これはあの壁をとびあがってきた奴なんだと信一は思った。

「そうだね、いたね。まだのぼってくるんだね。これで魚道をつくったら、もう少し沢山のぼってくるかも知れないね。縄文の森を目指して鮭のぼる、なんてヘタな俳句みたいな気持ちになるね」伊藤係長はそう言って、うれしそうに笑った。

#### 四

冬になった。佐原の町には筑波山の方から吹きおろす風が吹きはじめ、水郷地帯は枯れ野の風景となった。

この地方の水田は地下水位が高く、耕地整理が済んでもまだ湿地であったので、稲を刈ったあとに麦などを作るには不向きであった。それで、利根川べりの広い水田は、ただ黒褐色の刈株だけがこつていた。

こうした中で、冬場の信一の仕事のひとつは、やはり農業の安全対策として販売業者の指導取締りを行うことだった。

さらに、この冬は、夏に異常発生したイネドロオイムシの越冬状況も調査する必要があった。ただ、この虫の生態については、情報があまり多くなかった。害虫図鑑にも、発生地周辺の落葉や草の中で成虫で越冬する、と書いてある程度だった。信一は、大発生した小見川町の谷津田へ行き、まずは周囲の山すその斜面にはいり、落葉をかきわけてイネドロオイムシがいるかどうか調べていった。そこは清水がしぼれてくるような湿っぽいところで、落葉の下にはトウキョウサンショウウオという小さなサンショウウオがいたが、一時間くらい山をはいり回ったけれど、イネドロオイムシは見つからなかった。あれだけ大発生した虫がどこにも見つからないのは不思議だった。

帰りぎわ、車をとめておいたいつもの溜池の近く、枯れたマコモの群生しているところがあった。信一は試しにマコモの茎を割って調べてみた。すると、枯れたマコモの茎の中に、青く光るイネドロオイムシがはいっていた。それも、一本の茎に数匹はいつていた。そうか、こんな感じで越冬するのか、と思った。今、池の囲りには無数のマコモが枯れて立っていた。夏には青々としたマコモが繁り、溜池のそばの椎の古木には青大将がとぐるをまいていたのだ。信一はあらためて、溜池の古木に小さな蛇神がわんさと集まってきた騒いでいる「常陸国風土記」にあるあの「夜刀の神の話」の光景を思いおこすのだった。

——継体天皇の時代にヤハズノマタチという武人がいた。谷を開墾して田を開いたが、この時夜刀の神が大挙して押しよせてきた。そこでマタチは甲冑に身を固め、「これより上は神の地となし、これより下は人の地となす」と言った（この夜刀の神は身を蛇にして頭に角がある）。その後、孝徳天皇の時代にミブノムラジマロという役人がいて、その谷を占有して池の堤を作ったが、その時夜刀の神が池のほとりの椎の木に集まってきていつまでも去らなかつた。そこでマロは、「この池は人を生かすために作るのだ。それなのにどこの神が邪魔をするのだ」と言って、部下に命じて武力行使をした。それでたちまち蛇神は逃げて隠れてしまった——

新しい年が明けた。総合地方事務所は全部で百人近くの職員がいた。大会議室では所長のあいさつがあった。若い女性職員の晴着姿が目立っていた。

そうして一月十日、信一は伊藤係長と二人で、利根川沿いの台地の上にある側高神社へと出かけていった。香取神宮にはまだ初詣の人が出ていたが、この神社はうす暗く、ひどく寒かった。

それでも、本殿の前の広場には一団の人ばかりがあった。そこでこの日、側高神社の奇祭「鬚撫祭」が行われるのであった。ここは伊藤係長の地元の神社であった。夏にヘリ

境内に、女たちの笑い声がわきおこる。

信一は不思議な気持ちでこの祭を見ていた。はじめここに来た時、伊藤係長は側高神社に伝わる古い言い伝えを話してくれた。それは、側高の神が香取神宮の神の命令をうけて陸奥の国に遠征し、牝牡二百頭の馬をとらえて帰ってきたという話である。これはしかし、側高の神はかつての仲間である陸奥の国から沢山の馬を盗んできたということだ、と伊藤係長は言った。ということは、仲間を裏切り、率先してヤマト朝廷の手先になったということだ。自分たちはその裏切り者の子孫なのかもしれない、と伊藤係長はその時言った。

昭和二年の生まれで、旧制農学校を出たあと「満蒙開拓少年義勇団」として満州に渡ったという伊藤係長であった。鬚をのばして、アイヌの風俗を思わせるこの祭は、しかし千数百年の時間をこえて、この集落の人たちの共通の遺産になっているようだった。酒を飲みすぎて腰が立たなくなつた老人。あらや、あらや、と笑う女たち。伊藤係長もそれを楽しそうに見物しているのだった。

## 五

三月になった。

信一が佐原にある県の総合地方事務所に勤めはじめてか

コプター散布の安全祈願にきた時、正月になったらまた来ようと言っていたその祭だった。

それは宮番の引きつき行事として古くから行われていたと言われる祭で、社殿の前の広場に座が敷かれ、旧役番の家と新役番の家からそれぞれ三人ずつ男が出て向かい合ひに座る。そうして旧役番のものから新役番のものに酒がふるまわれるのであるが、それが大きな盃になみなみとつがれた酒で、それを新役番のものが一気に飲み干すというものであった。

そしてこれを「鬚撫祭」というわけは、その大きな盃の酒を、旧役番のものが自分の鬚を撫でると（この日のためにのばした鬚だ）新役番のものはもう三杯飲み干さなければならぬというもので、それを「鬚撫で三杯」と言うのだった。

御座を囲んで周囲には近在のものたちが見物している。旧役番のものがおもむろに鬚を撫でると、ワツと歓声がある。そしてここでの見せ場は、もう三杯飲み干す酒を、そつとうしろにまわして見物の人に飲んでもらうそのこっけいなしぐさである。新役番のうしろには、酒のおこぼれにあずかるうという男たちがいるのである。

盃をそつとうしろにまわす。口からむかえるようにしてそれを飲み干す老人。フーツと大きな息をして真赤な顔がまた一段赤くなる。昼でもうす暗く、凍てつく側高神社のら一年が過ぎようとしていた。町を流れる小野川沿いの柳の木も芽吹きはじめた。そして、水郷の早場米地帯は、春耕とともに種もみの準備で忙しくなつた。また稲作の季節がやってくるのだった。

信一は、伊藤係長とともに、大栄町の市川さんのサツマイモ畑の跡地でコガネムシの幼虫調査をやっている。十月から月に一度、今回で六回目の調査であるが、伊藤係長に状況を見てもらつて、これからの調査の方向性を決めようということだった。

冬の間、凍てついた土の中でじつとしていた幼虫も、春になって地温が上昇してくるとともに活動をはじめ、草の根などをかじりはじめる。そしてもう少し暖かくなつて四月か五月になれば、土の中に部屋をつくつてそこで蛹になるのだ。

信一は、それなら自分はこの一年で幼虫から脱皮したろうか、と考える。社会人になつたということは虫で言えば成虫になつたということかもしれないが、自分はまだまだ幼虫である。伊藤係長を見ていると特にそう思う。

その伊藤係長は、土を掘る手を休めて、遠くの森を眺めながら信一に話しかけた。

「島村君、あの森の向こうから飛行機が飛び立ってくるのはいつ頃だろうね」



嶋津治夫  
しまづ はるお  
1949 東京都生まれ  
71 茨城大学農学部卒業  
92 「父との関係」で関西文学賞エッセイ部門佳作入賞  
著書「白鳥悲歌—常陸国風土記異聞」(2002 / 濛標)  
「蜻蛉日記異聞—芥川龍之介の恋」(2010 / 驢馬出版)  
「一葉探訪」(2015 / のべる出版 企画)  
現在「全作家協会」会員  
千葉県香取市在住



成田空港の建設は、まだほとんど動いていなかった。反対農民とその支援の学生たちは団結小屋をつくって抵抗を強化していた。しかし、国家権力の前には、いつかはそれは減ほされていくだろうことは歴史が示していた。それでも納得がいかない者たちはそれならどうするか。

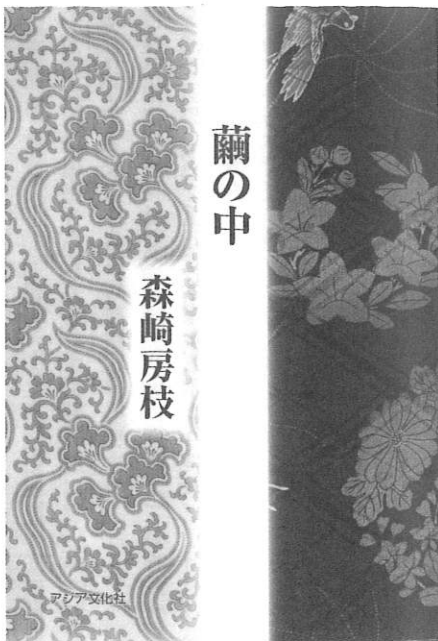
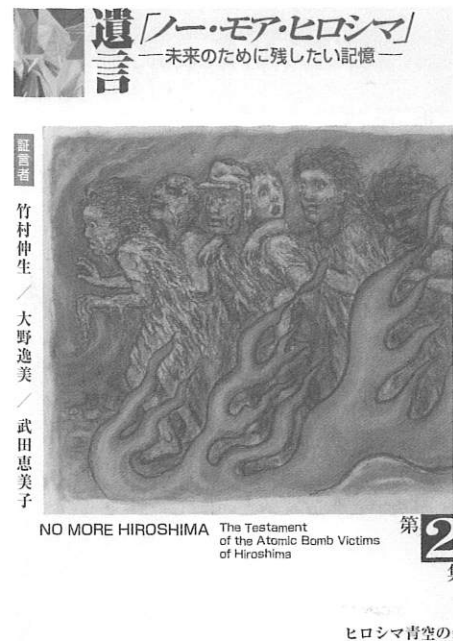
「オレはねえ、どうも今回の国のやり方はよくないと思う。ここは、古かろうが新しくかろうが農民の土地だ。まっぴらでとてつもなく広いということがわざわいしたのかも知れないがね」

信一は、地の来歴というものを思った。土地というものはいったい誰のものであるのだろうかと思った。その時、地面の中でかすかに騒ぐものがあつた。地面の中には沢山の生き物が生きていた。そして地面の上にも沢山の生き物が生きていた。信一は、地面の中からわき出てくる虫たちを思った。それはやがて姿を変えて、人の姿となって動き出す幻影を、信一はこの下総台地の土の上に見た。

「ところで、もう少しで今年度が終わるんだが、四月からはオレはここにはいないと思う。異動だね」と伊藤係長は言った。

「えっ、そうなんですか」と信一は言った。まだ新米の信一には、勤め人には人事異動があるということが実感としてわかっていなかった。

「四月からは、多分、農業化学検査所というところに転勤



証言者  
竹村伸生 / 大野逸美 / 武田恵美子

NO MORE HIROSHIMA The Testament of the Atomic Bomb Victims of Hiroshima

第2

ヒロシマ青空の

繭の中

森崎房枝

アジア文化社

〔「全作家」97号より転載〕

になると思う。千葉まで通うんだ。今の事務所には二十年もいるんだ。こんなに長くいる奴なんかいないからね。年貢のおさめ時はとつくに過ぎていくんだ」

そうして信一は、伊藤係長が農業化学検査所の調査第二課というところに課長としていく予定だと教えられた。それは新設の部署で、農業の残留分析を行って使用禁止農薬の有無を調べたり、農作物の安全性をチェックしたりする仕事だという。

「オレたちの仕事は、農家のためと、食料の安定生産だよ。今度の仕事は、その中でも特に安全性にかかわる仕事だ。時代がそれを求めているからね。島村君は、もう一人前だから、新しい係長と一緒に頑張ってやってくれ」

そうなのか。伊藤係長は新しい仕事につく。信一は自分も、幼虫から脱皮しなければならぬ時期がやってきたと思うのだった。遠くの杉の林は、花粉で赤くなっていた。

御注文はアジア文化社まで

金作家

東京都

多彩な表彰事業

「地の来歴」を掲載——季刊「全作家」

全作家協会は、昭和五十一（一九七六）年に創立されました。当初は全国同人雑誌作家協会という名称で、会長に丹羽文雄、理事長に森田雄蔵、事務局長に森下節、常務理事に宮林太郎、森啓夫、大類秀志といった方々がおもな役員でした。

それが平成十二年、全作家協会と改称され、現在に至っております。その間、ずっと発行し続けているのが「全作家」です。もう98号（最初は年一回または二回、平成十三年より年四回発行）になりました。現在は、豊田一郎会長、陽羅義光理事長、野辺慎一事務局長、吉岡昌昭編集長を中心に、「全作家」の発行はじめいろいろな事業を行っています。

主な事業をあげてみますと、全作家文学賞、全作家文芸時評賞、短編小説優秀賞、年度出版優秀賞、掌編小説優秀賞、全作家協会功労賞などの表彰事業を行っています。また、「全作家短編集」の発行（年一回）もあります。「全作家」や「短編集」を発行しますと、必ず合評会を開催し

ています。さらに、年一回の総会、忘年会（年度出版優秀賞の祝賀会）なども多くの参加者でにぎわっています。最近ではホームページ関連事業にも力を入れています。正会員一三〇名、読者会員二〇名の団体ですが、入会者を募っています。

「全作家」はすでに申し上げましたように年間四回発行しています。内容は、詩、エッセイ、小説となんでも載せます。毎号、横尾和博（文芸評論家）氏に文芸時評を書いていただいています。この中から、先の文芸時評賞が決まります。

また、毎年一回掌編小説特集があります。今年は百号を記念して全会員の参加を呼びかけています。

「短編集」は今年で14巻になりました。これには30枚前後の短編が約30編寄せられています。基本的には応募されたかたは誰でも掲載されています。

「全作家文学賞」は、協会創立当初から行っています。賞金額などの変更を重ね、平成十六年より賞金三十万円という現在の形になりました。この賞は、会員以外にも広く募っています。

年間事業の概略は以上のとおりですが、当会は、日本文学の発展を底辺よりささえるためなら、これからも新しい企画をどんどん取り入れていく所存です。皆様の今後のご指導、ご協力をお願い申し上げます。

さて、今回、嶋津治夫氏の小説「地の来歴」は「全作家」97号に掲載された作品です。もちろん合評会を催しましたが、正確な農村の描写と農業技術の普及事業に取り組んでいる主人公の真摯な生き方には賛同の声も多く上っていました。横尾和博氏も絶賛されていました。

全作家協会といたしまして、嶋津治夫氏のまほろば賞優秀賞受賞に際しまして、お選びいただいた文芸思潮の選者の皆様に深く御礼を申し上げます。同時に、嶋津治夫氏に対して、ともに祝いたい気持ちで一杯です。

（事務局長 野辺慎一記）

金作家



〒123・0864

東京都足立区鹿浜3・4・22のべる出版企画内

全作家協会 TEL 03-3896-6506

全作家協会

ZENSAKKA



# アンデスの祈り

辻村仁志

——ボリヴィア 海拔三七〇〇メートルの高所都市ラ・パス 一九九四年 九月

エル・アルト空港に降りてすぐ、私は酷い頭痛に襲われた。

ラ・パスの標高は富士山頂に等しい。渡航者は通常、近県のコチャ・バンバやスケレ市で数日、高度順化してから現地入りする。ペルー支社の田中からも忠告されていたのだが、私は経由地のリオから直行した。日本での残務に手間取り、出発日が遅れてしまったのだ。私は空港職員の介助を受け、あぐくバスの車中でも、酸素吸引を受けるはめになった。結局、低酸素に慣れるのに三日を要した。リマ

から急遽駆けつけた田中が、その間身の回りの世話をしてくれた。とにかく食欲はなく、宿のベッドで鉛玉を舐めていた。

「コンサルタント会社のホセと、中央銀行総裁のミゲルとの会合は、来週水曜に変更しました」

田中はそう言い、ココ茶を淹れて私に勧めた。水分で新陳代謝を高めるのが、高山病には有効だという。

「コカか……まさか中毒にならんよな」と冗談を言い、私はそれを飲んだ。

「でも香川さん、何か食べて体力をつけなさいと。そうだが、果物はどうです？ こっちのバナナは旨いですよ。メルカード（庶民市場）で安く手に入ります」

「ありがとう。まあ飯くらいは、自分で何とかするよ」

二日後、田中はペルー支社に戻るべく、チチ・カカ湖方面のバスに乗った。ラ・パスからペルー国境への湖岸路線は、景色の良い人気コースだという。バス乗り場で彼を見送り、私はふらふらと市街を歩いた。かくして、ボリヴィアでの最初の三日間は最悪であった。唯一の収穫は、喫煙という悪習を因らずも絶えたことである。煙草など吸う気分ではなく、第一電子ライターがここでは着火しない。宿のベッドでせえせえしているうちに、煙草のことなど忘れてしまった。ともかく歩くだけで息切れするような高所に、人口一〇万の都市があるのだから、人間の適応力には驚かされる。

——ラ・パス市の経済特区に、海外調達部を設立

大豆加工食品「鶴福」の役員から、私が辞令を受けたのは、その半年前である。

当時ボリヴィア政府は、ラ・パスとサンタ・クルス両市に、フリーポートなる経済特区を設けた。海外資本の誘致を経済発展の国策とし、破格の優遇税制を施行したのである。起業、投資、貿易への法規制を緩和した同地区に、欧米の資本が続々と参入。その先陣を切ったのが、金融、投資コンサルタント業であったのも、外資系企業には追い風となっていた。

フリーポートの特典を利用して食品工場を設置。低コストでボリヴィアから周辺国へと拡販を見込み、鶴福ブランドを南米に定着させる狙いである。その基盤を作るべく、現地視察の先兵として、私は指名された（とはいえ抜擢の根拠は単純で、スペイン語が話せる独身者、というに過ぎないのだが）。

当時も今も、南米新興国は日本には縁が薄い。東南アジア諸国と比べても、地理的、政情的なデメリットで二の足を踏む企業が多い。しかし農業とその二次産品の資源でいえば、潤沢で魅力ある地域である。特に大豆の生産高は南米随一で、食品加工等の技術面をサポートすれば、多大な収益を見込めると、役員は踏んだのだろう。

滞在四日目、病状が快復してきた私は宿を出て、庶民市場へと向かった。

予習はしていたが、思った以上に坂道が多い。飛行機から見ると、ラ・パスは楕円状の地形をしており、街の周囲は小高い丘陵地だ。低地にはビジネス街、高級住宅地があり、丘陵地が低所得者の居住区である。貧困層は多いが、治安はまずまず良い。これは私見だが、ボリヴィアは物価が安く、特に都市部は教育、インフラも整備されているのが要因と思える。

急な坂は息が切れる。私は旧市街のサガルナガ通りから、メルカド・ネグロ（市場）を目指した。賑やかな沿道に、



甲高い女性の声。人波が密度を増し、様々な商店、露店がたち並んでいる。いつしか私は、市場のただ中にいた。先住民系の女性が、チョラという黒い帽子を被り、大声で客引きをしている。私にも声をかけてきたが、アイマラ語かケチュア語らしく、理解できなかった。公用語はスペイン語なのだが、土着語を使う人もまだかなりいるのだ。

歩道には、三つ編みの髪に山高帽を被り、房飾りの付いたショールを纏った女性が目につく。先住民と西欧人の混血で、メステイサと呼ばれる。ポリヴィアの人口の約三割が彼らで、残り七割をほぼインディヘナ（先住民）が占める。喧騒の中、食べ物の香りがたちこめ、つい足を止めた。市場には随所に、コメドールという簡易食堂がある。ラ・パスに来て、まだまだともな食事をしていなかったため、空腹をおぼえた。

手頃な食堂はないかと、辺りを見回す。その時ふと、呼びかけるようなスペイン語が耳を突いた。

「ハポネス」

——え？ ハポネス（日本人）？

私は声のした方に目をやった。さん、と耳に響くような、子供の声だ。

気のせいかと歩きかけた時、また同じ声。私の右手に、玩具のような小物を広げた露店がある。アルパカ織のカーペットに座り、うつらうつら寝ている老女が一人。すぐ脇

に十二歳くらいの男の子が、こちらを窺い見ている。

「やつぱりな、ハポネス。おじさん日本人だね。当たった」

浅黒い肌の、細身の少年である。私は面くらつたが、大きな人懐こい瞳に、なぜか親近感がわいた。何かを買ってほしいようだ。私は露店の前に屈み、自動車や人形、日用品のミニチュア等をひと通り見た。

「ハポネス、ひとつ買っておくれよ。どれも縁起物のお守りだ。安くしとくぜ」

妙に愛想がいいが、油断ならないと、私は警戒した。しかし、これも単身赴任の記念だ。私は右隅の、ひげ親父が煙草をくわえている人形を指さした。人形は禁煙中の私をあざ笑うような、意地悪な顔をしている。

「これはエケコだ。幸運をもたらす神の化身だよ。よし今日はサービス・デイだ。五十ノス（ポリヴィアの通貨／約七米ドル）でいい」

「五十？ ちと高いな。少し負けてくれよ」

からかい半分に、私は少年に言った。少年は目をきらきらさせ、ズボンのポケットに手を入れた。

「じゃ、俺と勝負だ。勝ったら四十ノスに負ける。簡単なゲームだよ。やるか？」

怪訝な私の面前に、少年は黒い手帳を出して、広げてみせた。かつちりとした字で、スペイン語の文章が書いてある。「これがゲーム？」と私は尋ねた。

「これを早口で三回言って。言えたらハポネスの勝ち。言い間違えたら俺の勝ちだ」

早口言葉か。うさん臭さをおぼえつつ、手帳に目を凝らして見た。

Como poco coco como, poco coco compro.

（私はココナツを殆ど食べない。だからココナツは殆ど買わない）

手帳を広げたまま、少年はにんまりと私を見ている。ふうと息を吐き、私はトライした。

「コモ、ポコ ココ……ええと、コモ、コポ……あれ？」

「コモ、ココ……だめだ！」

肩を揺すって、少年は笑った。傍の老女は目を閉じたまま、すうすう寝息をたてている。私は両手を広げ「降参」のポーズをとった。

「だめだな、一回目でアウトかよ。俺の勝ちだぜ」

差し出された小さな手に、私は代金を渡した。少年はひげ親父を取ると、ハーモニカのミニチュアのペンダントを、その首に掛けた。

「なんだいこれは？」

「これも縁起物だよ。ハポネス、エケコはただの人形じゃない。毎年一月の神事に、大聖堂にこれを持って行って、神前でお清めしてもらう。清められた人形は、神様のご加護で、持ち主の願いをかなえ、幸せにするんだ。飾りを付

けてやるとご利益が大きい。どうだ、得しただろ」

幸せのお守りか。眉をひそめて、私はひげ親父の髭をつまんでみた。煙草をくわえたこの人形が、荘厳な大聖堂の中で、礼々しく大司教の祝福を賜う様子は、どうにも違和感がある。ハーモニカのミニチュアは、しかし意外と精巧な造りで、吹いたら音が出そうな質感だ。得したような損したような気分で、私は人形を手提げ袋にしまった。

「そうだ、君の名前を聞いておきたい」

「チコだ。チコ・セルバンテス。おじさんの名前は？」

「ノリオ・カガワだ。楽しかったよ、チコ。また来る」

「カガワ……しつくりこないな。ハポネスでいいや。俺は土曜と日曜はここに居るから、また買いに来な」

少年に手を振り、私はその場を後にした。寝ていたままの老女は、少年の身内なのだろうか。食事を済ませた後、何か気になり、もう一度露店の前を通ってみた。寝ていた老女はその時は元気に、先住民の言葉で接客をしていた。少年の姿はなかった。おそらく店番の手伝いを、パパートタイムでしているのだろう。

ラ・パス滞在三カ月の間に、私は何人かの友人を得た。現地の法律顧問（弁護士）、シテイ・バンクの役員、企業コンサルスの相談員、国際協力事業団のスタッフ等々。フリーポート内での法律的、契約上の諸問題を整理し、情報を

集めるのが当面の課題である。しかし実務上のあれこれ以上に、私が重視したのは、人脈の構築であった。公私両面でフランクに話せるパートナーを、一人でも多く作る。その意味では予想以上の成果を得た。しかし私がラ・パスでいちばん親交を深くしたのは、チコ・セルバンテスに他ならない。初対面でのチコの瞳が、とても印象的であった。ポリヴィアの聖地、コパカバーナの高台に広がる、紺碧の湖（ブラジルのコパカバーナ・ビーチは、この地名から取ったもの）。その澄み渡った水面のような、輝きを放つ瞳。言葉づかいの横柄さとは真逆の、優しい憂いに満ちた瞳である。

「よう」  
私の問題提起に、ミゲルは率直にこう言った。  
「ミスター香川、フリーポート内でなくても、建築規制の緩い借地は沢山あります。大豆農園の管理ユニオン、企業とのジョイント事業であれば、政府の規制が及ばない有利な起業制度が活用できます。法改正前の今がチャンスといえます」  
ミゲルとの面談のあと、午後はコンサルタント顧問のホセ・マルティネスの事務所を訪ねた。ホセは現地の農園管理者との提携における問題を示唆した。  
「政府は今、アメリカの支援を受けて、非合法のコカ農園取り締まりを強化しています。しかしその成果は思わしくない。コカの代替作物を率先してやる管理者の中にも、闇業者と裏で結託している場合がある。ジョイントには慎重をきるべきです」

「ご存じかとは思いますが」  
流暢なスペイン語で、ミゲルはジュエスチャーを交え、私に言った。  
「フリーポートを含め、ポリヴィアには円建てで取引できる金融機関がありません。流通する通貨はノスと米ドルのみです。しかしフリーポート内での収益を国外送金するさい、優遇税制があるので、手数料以外のコストは不要です」

「為替については、今はノー・プロブレムです。ただ工場誘致をこの地区で認可する際に、クリアすべき課題があるのでし

ホセの真顔に、私はこの国の闇の一端をみていた。アメリカの闇市場で取引されるコカインは、一説に年間六十兆円といわれる。皮肉にも取締り支援国のアメリカが、闇ルート精製コカインの最大消費国なのだ。重苦しい雰囲気の中、ホセは場の空気を和ませるように言った。  
「ペルーの田中さんが言っていましたよ。香川はいい奴だから公私両面、よろしく頼むと」  
ホセは面談の後、私を夕食に誘った。土地のビールを勧

められるまま飲んだが、これが美味でつい飲みすぎてしまった。私はここが高所であることを、うっかり忘れていた。宿に戻ってから、悪酔いが酷くなった。次の日目覚めると、時計は正午を回っていた。枕元に置いたひげ親父は、相変わらず煙草をくわえている。

宿を出てジュースでも飲もうと、メルカド・ネグロへ向かう。市場に着くと、自然と足がチコのいた露店に向いた。木曜日で彼はいるはずがないのだが、何か気になった。

「おや、と露店の前で足を止めた。例の老女の傍で、平然とチコが接客している。」

「おや、ハポネス、元気が。今日はどれを売ってやろうか」  
私は苦笑して、露店の前に立った。この市場では売る側が偉いらしい。老女は私に目もくれず、先住民語で何かチコに言った。

「ばあちゃんがお昼にしろって。ロドリゲス通りの食堂に行くけど、一緒にくるか？」

「いいね、喉が乾いてたところだ。案内してくれ」

チコのお勧めの食堂は、煮込み料理の店のようだ。時刻は午後一時過ぎだが、店内は混んでいた。通りに面した席で、私はマンゴ・ジュースとラム肉の煮込み、チコはパンとサフタ・デ・ポヨ（鶏肉と玉葱のシチュー）を頼んだ。肉は柔らかく、煮汁も野菜の旨味がきいて美味しい。パンをちぎりながら、チコが言った。

「今日は学校があるけど、さぼって店番してるんだ。ばあちゃんは一昨日十五ノス（約二米ドル）お駄賃をくれる。バイト料にしちや安いけど、小学生じゃ文句いえない」  
ポリヴィアでは日本の義務教育にあたる小学校が八年、その上の中学校が四年制で、その上は大学である。日本式に言えば、チコは今六年生にあたる。  
「そうか、でも学校はなるべく行った方がいい。君は大人になったら何をやりたい？」

「学校の先生。俺みたいな貧乏人は公立の師範学校に進まない。だから今から学費を貯めてる」  
食べながら、チコは自分の身の内を話した。両親とは一度も会ったことがなく、物心ついた時には、カトリック教会の養護施設にいた。養護施設で、現在二十人の孤児と暮らしている。一緒にいた老女は肉親ではなく、ただの露天商だという。

「施設の子は、君と同一歳くらいなの？」  
「いや、下は五歳から上は八歳のチビどもだ。だから俺が学校の宿題の面倒をみてやってる。勉強をみてやると、なんとなく学校の先生が向いてそうな気がしてきた。昔話を聞かせたり、クイズを出したりして遊び相手もやる」

チコはそう言うと、ポケットの手帳を取り出した。  
「ここに色々なクイズや、早口言葉を書きとめてあるんだ。俺がこれを見せると、チビどもが寄ってくるんだぜ」

食事が済み、私は勘定を払おうと、給仕に声をかけた。

「チコ、友だちになれた記念に、ここは私が持つ」

「待つてハポネス、人の施しは受けない」

「じゃあ、ワリカンでいいの？」

「そうだな……うん、じゃこうしよう。この前みたいに勝負してよ。負けた方がここを持つ。いいだろ」

「え？ 勝負って」

チコは又、手帳のあるページを広げて差し出した。あにはからん、また早口言葉のようだ。私は口を尖らせ、首を横に振った。

「これを早口で三回。言えたらハポネスの勝ち。しくじったら俺の勝ち」

「やれやれ」

Pabito clavó un clavito. Sque clavito clavó Pabito?

(パブリートが釘を打った。パブリートはどの釘を打ったのか?)

「仕方ない。いくぞ……パブリートクラブ、アン、ク、クラ、クラブ……痛！」

思わず舌を噛んでしまった。三回どころか又、一回目でコケてしまった。チコはくくく、と笑いながら、肩を揺すった。

「また俺の勝ちだ。悪いなハポネス、ごちそうさん」

食堂を出て、チコと私はもと来た道に戻った。肌を焼く

間、彼の中である種の葛藤が生じたようだ。何かを要求したいが、それを逡巡する思い。私もまた、その時どう言葉をおかけたものか迷っていた。

露店に着くと、私は宿の住所を書いたメモを渡した。

「チコ、私はまだしばらくラ・バスに滞在する。暇な日によければ遊びに来い」

「うん……」

老女は怪訝な顔で、私の顔を舐めるように見た。私は努めて懇懇に、日本式に一礼して去った。変な動機で彼に近づいたのではないと、分かってくれたであろうか。つまりぬことに気をもむ自分が、馬鹿みたいに思える。

宿に戻る途中、私は意味もなく、先程の文章を反芻していた。

「パブリート、クラブ、アン、ク、クラ、クラ……だめだ！くそ」

ラ・バスでの市場調査が一段落すると、私は報告書を電子メールで本社へ送った。

本社の経営陣が意図するものは、つまるところ採算性の評価だ。設備投資にみあう収益とリスクをどう秤に掛けるか。

私はあくまでデータ收拾の斥候であり、判断は一任されていない。先に「人脈の構築の重要性」を言ったが、万一本社が白紙撤回すれば、否応なくそれも無に帰することにな

ような陽射しが、石の歩道に照りつけている。それでも九月の気温は、日中でも一五度ほどだ。市場の界隈は細い路地が多く、うっかり入ると迷子になる。途中、若いメステイサの女性と目が合い、睨むような視線に身がすくんだ。チコは私に振り向いて言った。

「街中は気をつけな。旅行者と分かると目をつけられる。特にいきなり声をかけてくる女や、『身分証を見せろ』なんて言ってくるニセ警官には」

「うん、その辺は予習してるよ。チコ、それと私は旅行者じゃない。実はここにはビジネスで来てるんだ」

はたと歩を止め、チコは私を上目使いに見た。黒い瞳が、灰かに潤んだように見えた。

「ハポネスは、ビジネスで来てる……ということは、ね、あちこち回ってるの？」

唐突な質問に、私は戸惑った。しかしチコの表情は妙に大人びて、真剣であった。

「そりゃ用事があれば、サンタクルスやスクレにも行くが、何でだ？」

「え、いや、何でもない。いいんだ……」

一転してきまりの悪そうな様子で、チコは背を向けた。誰にも臆せず、対等な口利きをする凶太さと別の一面が、その表情にかいま見えた。

チコは黙ったまま、歩を早めた。私が素性を明かした瞬

る。それでも私は、人と人の絆が第一というスタンスは変えない。それは海外での赴任生活で、常に実感させられたことなのである。

とはいえポリヴィア人の時間のルーズさには、時に閉口させられた(会議や外での待ち合わせで、殆どの者は平然と遅刻する)。数少ない例外がコンサルタント会社のホセで、彼は常に相手の立場で話し、こちらの求める以上の情報、助言をくれるのである。

十月のとある週末、ホセは自宅に私を招いた。

彼は一人身だが、カラコト地区(市内の新興住宅地)に一軒家を所有していた。淡いオレンジ色の、スタッコ塗装の壁と前庭の芝が、良い調和を醸している。目を引いたのは二階バルコニーに突き出た望遠鏡で、彼は照れ笑いを浮かべて言った。

「近所の人はうさん臭い目で見ますが、あれは天体観測用です。土星の輪や、秋から冬にかけての流星群や、特に月の表面をズームして見ます。月は昇った位置で、微妙に色合いが変わる。とても神秘的で魅かれます」

ホセは子供のように目を輝かせ、何百光年彼方の銀河を観るのは、遠い過去へのトリップなのだと口にした。

私達は窓際に置いたテーブルで、珈琲を飲みながら午後ひと時を過ごした。バルコニーから外を望むと、ビル群や高架道路の先に、高い丘が市街を見下ろしている。ラ・

パス特有の掃り鉢構造の地形で、高所ほど貧困層の家が密集している。私はチコの居る施設も、あの丘のどこかに在るのかと思った。

「カガワ、この前はビールで悪酔いしたそうですね。だから今日は少しだけ」

ホセはスライス・チーズの皿と、ポリヴィア産のワインをテーブルに置いた。が、ポトルのラベルには「チリ産」と表記がある。原料の葡萄が国内産で、チリで醸造した物だという。食品も衣料も、地産品の精製、加工は隣国に頼っているのがこの国の現状だ。

「二次産業の脆弱さが、この国の大きな課題です。だからあなたの会社のような、生産のノウハウを提供してくれる所が、もっと来てくれれば良いのですが」

ほどよい塩味のチーズが、ワインによく合った。ついもう一杯、と行きたいところで、私は遠慮した。いっしょか沈みかけた夕陽が、空を紅く染めている。暗くなる前に宿に戻ろうと、私は腰を上げた。

「ホセ、今日は楽しかった。でもこれ以上お邪魔しては、夜空を観察する楽しみの時間を削いでしまう」

「カガワ、帰る前に、あなたに見せたい物があります」

玄關脇のガレージに、私は連れて行かれた。中にはクライスラーのジープと、年式の古いワーゲン・ゴルフが置かれている。ゴルフはボディに傷、凹みがあるが、中は綺麗

に掃除されていた。ホセは作業機の引き出しから、車のキーを出した。

「良かったらこれを、普段の足に使って下さい。処分しようと思っていた車だが、まだ暫く滞在するのなら、あなたにキーを預けます。いつでも連絡をくれれば、シャッターを開けておきますから。使い終わったら戻してくれればいい」

私は恐縮して、そのキーを受け取った。

「ありがとう、これから近郊の農園とかを回るのに、とても助かります」

帰国の予定はいつかと、ホセに聞かれたので、十一月の末だと答えた。すると彼は何か思い当たったように、ぼんと手を打った。

「もしよければ十一月の三日、ポトシ県（ポリヴィア中部）の方に行ってみて下さい。実はそこで、皆既日蝕が見られます。世界中から天体マニアがやって来ますよ。私はその日はマイアミへ出張でいませんが」

「それは、興味深いですね。ポトシ県のどの辺りか、お勧めの場所がありますか」

ホセはジープのダッシュボードから地図を出すと、ウユ二塩湖の部分に○をした。パンパアウヤガという牧童の住む村で、そこでは日蝕の日に、インディヘナの古い儀式が執り行われるのだという。

「村人は日蝕の日、彼らが崇める聖地の丘で、大地神パチヤママに食べ物、薬草等の供物を捧げます。今では希少な宗教儀式です」

私は日蝕以上に、先住民族の伝統神事に興味を持った。

宿に戻ると、スケジュール帳の十一月三日欄に *Eclipse* (日蝕) と記入した。

翌週の土曜日、チコが宿を訪ねて来た。

昼から雨だということで私は外出を控え、部屋で読書や観光地図を見て過ごした。丁度日本から国際便で、カップ麺や菓子（私はそれを「支援物資」と呼んでいる）が届いて、それを食事代わりにしていた。

昼過ぎにドアがノックされた。合羽のような上着をはおったチコが、ドアの前に立っていた。そのまま入ろうとしたので、濡れた上着を戸口で脱がせた。

「今日は露店が早じまいなんだ。ばあちゃんが風邪ぎみで、体を濡らしたくないって」

チコの髪も、しっとり雨で濡れている。私はバス・タオルを渡し、熱い紅茶を飲ませた。「支援物資」の包みからチョコ・クッキーを出すと、嬉しそうに手を伸ばして食べた。

「ハポネス、このお菓子は、まだあるの？」

クッキーの箱を指して、物欲しそうにしている。施設の

子供にも分けたいのかと思い、バケージから三つ四つ取り出し、手提げ袋に入れた。

「ほら、食いしん坊君たちに分けてやりな」

「あ、ありがとう……でも、タダじゃ……」

「いや、今日は勝負はなしで行こう。これはつまりサービスだ。ほら、君がエケコに付けてくれたハーモニカと同じだ」

納得したのか、チコは満足げにクッキーをほおばった。

それからポケットから紙幣のミニチュア（紐が付いている）を出して、ひげ親父の首に掛けた。

「じゃ、俺からもサービスだ。玩具のお札だけど、これでハポネスの仕事は儲かる。エケコは持ち主の願いを必ずかなえる。俺が請け合うぜ」

「請け合うとは恐れいったと、私は苦笑した。日本の七福神に比べて、ややいんちき臭い風貌だが、チコの気持ちは嬉しい。私は、ハーモニカと札束を首に提げたひげ親父の手に取った。

「じゃあここで願をかけよう。ええとエケコの神様、どうかビジネスがうまく運んで、会社が商売繁盛しますように」

「ビジネス…… そうだ、ハポネスはビジネスで来たんだよね」

ふと私は、この間のことを思い出した。何かを言い辛そ

うに押し黙った彼の、憂いを帯びた顔が蘇った。  
 「そう、ビジネス。君はあるとき、何か気掛かりな風に、色々な所を回ってるのかと、聞いてきたけど」  
 うんと頷き、表情を固くした。あまり問い正すと、却って口を重くさせる。私は穏やかに言った。

「実はね、こつちで知り合った友達が、車を貸してくれたんだ。私の仕事は、大豆農園や工場を建てられそうな場所を回って、その人とお話をすることなんだよ。もしやだけど、君はどこか行きたい所があるのか？ 車やバスでないと行けない場所」

「うん……行きたい場所は、ある。ただ、どこって……はつきり言えない」

私はチコの表情を注視しながら、彼の蟠りをほぐすように話題を変えた。彼を真似て手帳を開き、日本語の早口言葉を書いて見せたり、日本での暮らしなどを話して聞かせた。ふと思いついたり、手帳にスペイン語の諺を書いて見せた。

「チコ、これは学校で習ったかな？」

Para el hambre, no hay pan duro. (空腹に、固いパンはない)

「え？ 習ってない。どういう意味なの？」

「うん、お腹が空いている時は、固いパンであれ何でもおいしく食べられる、ってことさ」

だ。子供らしい強がりやと、望郷の思いがない混ぜの、複雑な気持ちの一端がうかがえる。心を開いてくれた友に、私はひとつ提案をした。

「チコ、来月の三日に、私はウユニ塩湖畔の村に行く。ビジネスではなく黒い太陽、皆既日蝕を見に行くんだ。たぶん車でそこまでは、何時間もかかる。でも君の言う、農耕民族が細々と暮らす村が近隣にある。場所の特定はできないが、方角と距離はほぼ一致する。もしよければ一緒に行くかかね」

チコは驚いた風に、目を輝かせた。皆既日蝕は限られた緯度、経度の範囲でしか見られない現象だと、学校で習ったという。

「……でも日蝕観測って、特殊な道具が必要なんだろ。俺、そんなの持ってないぜ」

「大丈夫。板紙に遮光フィルムを付けたような簡単な物なら、市内で手に入ると思うよ。ただその前に……」

施設の責任者の承諾があると、チコに言った。身内でもない者が未成年者を連れ出すとなれば、許可はおりないだろう。しかし当人は、そんな懸念もどこ吹く風で私に言った。

「平気だよ。朝、ばあちゃんの露店に行くって出て、夕方までに戻れば問題ない」

「嘘はよくないぞ。だいいち日蝕を見るのは三日の早朝だ

「へえ、でもあのお菓子はおいしかった。たぶん腹いっぱいでもおいしかったよ」

それから暫く、私達は互いの手帳を見せたり何かを書いたりして遊んだ。談笑しながら、チコがぼつりと、私に言った。

「ずいぶん前に、ある人から聞いたんだ。『お前のお母さんは、ここから南東に三百キロ以上離れた、高地にある貧しい村にいる。そこは西にサハマって山脈の聳える、塩の湖が近くにある村だ』って」

私は机から地図を出した。ラ・パス市を起点に西にサハマ峰を望む地帯は、アルティプラノと言われる広大な不毛の原野だ。標高もここ同様に高く、人が住める村落も少ない。先週ホセから教わった、ウユニ塩湖畔のパンパアウヤガ村も、このアルティプラノの南端にある。

「君はそこに、行ってみたいのだね？」

「いや、ハポネス。俺は自分の母さんなどに会いたくない。神様のお陰で、俺はとても優しい親代わりの人と会えた。俺やチビどもを育ててくれたマザーだ。ただ、自分の生まれ故郷がどんな所か、見てみたい。いちどそこに行つて、ああこんな場所かつて、確かめられればいいんだ。どんな人が、どんな暮らしをしているか。それが見られればいいのさ」

言い終えると、何かがふっ切れたように、チコは微笑ん

から、その前日から出掛けることになる」

うーんと唸って、チコは地図に目を落としたまま黙った。まずい提案をしたのかと、私は後悔した。このままでは、彼にぬか喜びをさせてしまいたい。

「とにかく、次に会うまでにどうするか決めよう。さて、雨が酷くなってきたから、車で施設まで送るよ」

ホセに電話をしようとする私を制止して、チコは上着をはおった。お菓子の手提げ袋を手に、自分でドアを開けた。「いいよ、一人で帰れる。途中でばあちゃんに薬を届ける用があるんだ」

アデオスと言い、踵を返すと、チコはたたと、と階段を降りていった。

その翌週の日曜日、宿に來客があった。

訪問者は六十代くらいのインディヘナの女性だが、彼らの特徴的な衣装ではなく、修道女の服を着ていた。手に見覚えのある手提げ袋を持っており、ふと思いついた。チコが「マザー」と呼ぶ、施設の責任者。女性は私を見るなり「チコがお世話になって」と、手提げ袋を差し出した。「クッキーのお礼に、バナナ・ケーキをお持ちしました。お口に合うと良いのですけど」

袋の中身は、ルリバイという赤いバナナを使ったロール・ケーキだ。私は礼を言つて、ドアを開けた。話をした

そうなので、どうぞ中へと言いかけて、やめた。部屋が朝のまま散らかっている。私は外のカフェに彼女を誘った。ハンナ・マラケーニャというその女性は、養護施設の代表らしい。私は簡単に、滞在の目的を話した。

「私がチコと親しくしたことで、いろいろご心配おかけしれません」

「いいえ、チコからあなたが日本人であると聞いて、安心していました。ご存じかは知りませんが、いま大学の教育学部の改革に、日本から多大な協力をいただいています。教職員の知人も口々に、日本の職員は親切で紳士だと」

後で知ったことだが、私が渡航した年は、ポリヴィアの大学に教育学部が設立され、日本の国際協力事業団が援助をしたようである。教員養成の門戸が広がるのは、チコには朗報かもしれない。

「チコは、自分は初等学校の先生に向いてると、言っていました」

「彼は、とても下の子たちの面倒見がよいのです。宿題を見るときでも、問題や説明の文章をよく読め。まず文章を正しく読むのが大事だ。って、よく言ってます。文章や言葉に、彼は独特な感覚があるようです」

ふと、あの手帳の文章を思い出した。もしラパスに再訪の機会があれば、その時は彼の素養になりそうな本を持つ

てきてやろう。チココ・クッキーと一緒に。

他愛ない会話の中で、先日の日蝕見学の話を、こちらから切り出そうか迷った。ハンナにしてもただ私に、キーキを届けに来たとは思えない。彼女は少し間をおいて、言った。

「カガワさん。口には出しませんが、チコは故郷に強い思い入れがあるようです」

「それは……本人から聞きました」

「彼はもう自分で考え、判断して行動できる年齢です。もし本人が、それを強く望んでいるなら、それを叶えてあげたい気持ちがあります……ただ」

「ただ？」

「彼はあなたのことを、とても気遣っているようです。故郷の話をしたことで、あなたの心に負担をかけてしまったと。それと、じきに日本へ戻るなら、あまり親しくなると別れが辛くなる、とも」

彼女は真直ぐ、私を見た。そして「本人には内緒に」と前置きして、彼の生い立ちについて話し始めた。

「生後間もないチコを私どもに預けに来たのは、年長のカリヤワヤ（南米諸国を巡り医療活動をする呪医）でした。チコの故郷はパンパアウヤガに近いキアカという村で、これはカリヤワヤから直接聞いた話です」

キアカで医療巡回をしていたその男は、ある日村の長老の要請で、男児を出産して間もない女性の診察をした。女性は

未亡人で、重い病の床にあった。高熱でひどく痩せ衰え、食物を全く受け付けない。傍らには乳飲み子がおおり、栄養失調で危険な状態にあった。男は子を長老の家に預け、女性には投薬の他に呪術的儀礼の施術を試みた。四日後、治療の甲斐なく、女性は衰弱死した。長老を介して、子供は近隣の町の病院に送られ、一命をとりとめた。しかしキアカの村では、その母親の死について迷信めいた風評が広まったのだという。

「つまりその子がチコで、その村に広まった風評とはどのような？」

「キアカはもともと、土着宗教の聖地として、伝統神事、行事の盛んな土地でした。後にスペインからの入植者が、カトリックの教会を建てたことで、村はキリスト教の聖地を兼ねるようになりました。二つの異なる宗教、文化の並立で、アイマラ族の祖先は新たな宗教観を生み出しました。異邦人によって、ポリビアに災いがもたらされた。彼らは時に魔物と化して、インディヘナの暮らし、生命を脅かすと。それは一種の歪んだ魔物信仰です。風評はそれに端を発したものでした」

その母親の死は、人体から脂肪を抜き取る魔物（カリシリ）によるもので、魔物に呪われた彼女の子供も、放置すれば村に災いを呼ぶ、との噂が広まった。彼女の死因は、黄熱病のような感染症と推察されるが、村人の過半数は、

その迷信を信じていた。カリヤワヤの男は魔物信仰に否定的で、彼らの説得を試みたが、徒勞に終わった。ついには長老に、子を生贄に捧げるよう強要する村人まで現れた。カリヤワヤは「北へ向かえ」という大地神の啓示を受け、長老からその子を引き取り、一路ラ・パスへ向かった。

「カリヤワヤの男は私に対して、この子を守る使命をあなたに託したい、と言いました。私は彼の話にやや懐疑的でしたが、これも主の導きと、チコの身請けを了承したのです」

ハンナの話が事実なら、チコにとって故郷の村は、悪い因縁の地ということになる。しかし十二年を経た今、そんな噂は風化していよう。第一、彼自身には関係のないことだ。

帰りしな、ハンナはふと思いついたように、私に言った。

「実は、市場の露店は当分の間、休業になります。露店商のご婦人が、眼病の悪化で今日入院されました。チコはこの機会に、帰郷の旅の同行を願ひ出るかも知れません。でもあなたはこちらでお仕事がありますので、どうかご無理なさらず」

その晩私は、ひげ親父を膝に抱えたまま、様々な思いを巡らせていた。日本に帰国した後、工場の施設にゴーが出れば、再びこの地を踏むのだろうか。リマ支社の田中のように、次は長期赴任となるかもしれない。

——となればチコとの交友は継続できる。もともと、今の施設に彼がいつまでいるのか。ともあれハンナの言うように、

チコが同行を願い出たなら、連れて行くのは構わない。もう休むかと、抱えたひげ親父を枕元に置き、ベッドに横になる。なぜか不意に日本での生活のあれこれが、懐かしく思い出された。

ハンナとの出会いを機に、私は土着民、アンデスのインディヘナの文化、宗教に興味を抱くようになった。

一言で集約すれば、それは日本の神道にも通じるアニミズムだ。大地宇宙、森羅万象すべてに神が宿る。神託を受けた賢者が、人間界と神との仲介者となり、儀礼をとり行う。

もう一つ特徴的なのは、仏教の死生観を取り入れたかのような、彼らの葬祭儀式である。死者が天に召されるまで、魂は本人の死後八日間現世をさまよう。魂が神に迎えられる迄の八日間を遺族の服喪期間と定め、その間の儀礼をヤティリという賢者が取り仕切る。

古くインカの時代から継承されたアニミズムは、命を宿す物全ての均衡、バランスの取れた関係性を重んじる。星の自転、公転に一定の周期があるように、各々の要素の、均衡のとれた関係が重要であり、山も大地も人間もその流転の一部分に過ぎないとする。

十一月三日、チコを伴っての日蝕探訪は、丁度カトリックの万聖節（一日）と万霊節（二日）と重なり、各所で死

村を眺めている。私は彼の傍に、そっと腰を下ろした。

「日蝕を見ないのか？」

チコはやや潤んだ瞳を、私に向けて微笑んだ。

「うん、この村の墓地がどこかな、つて探してた。確か今日は死んだ人の魂を、天国へ見送る日だつてマザーから聞いてたから。だから村の大人達が集まって、墓地でお祈りしているはずなんだ。でもどこにも、それらしい場所が見つからないし、人の集団も見えない」

「チコ、その儀礼の日は昨日のことだ。それにカトリックの万霊節の行事なら、墓地ではなく教会だろう」

腰をおろしたまま、私も村の集落をぼんやり眺めた。丘の頂に着いた頃、冷たい風に身を震わせたが、今は暖かい微風が吹いている。母親の魂が、チコにそっと寄り添っている様な、優しい風だ。

八時二十分、日暮れのように暗くなった丘に、歓声が上がった。すっぱり月影に覆われた太陽のコロナが、細い輪を描いている。もはや観測具なしでも、肉眼で確認できる。黒い太陽を讀めるように、星がきらきら輝いている。野鳥の一群が甲高い声で鳴き、周囲を飛び交っている。私は立ち上がり、太陽の端から眩い光が現れる四、五分間、その荘厳な姿に目を奪われた。

「ハポネス」

傍らのチコが、私の上着の袖を引張る。暗がりの中、彼

者の魂の迎え入れ、送りの儀が執り行われる。お盆の迎え火、送り火のように、故人の魂が来世と現世を行き来するという観念は、人間の普遍的な死生感なのだろうか。

二日の午後、私とチコはパンバアウヤガに到着した。村の者に、日蝕時の神事について訪ねると、隣村のキアカに行けという。本人は知らないが、チコの因縁の村だ。私はやや躊躇ったが、キアカへと車を走らせた。

小さな村の傍に小高い丘があり、中腹から山頂に等間隔で十字架が立てられている。ハンナが話してくれた、スペイン入植者が建てた教会があり、翌日そこでミサが行われるという。村の外れに学校を見つけた。終業時間を待って、子供たちが校庭に出てくると、チコは彼らに、持参した日蝕の観測具を自慢げに見せた。明日の朝丘の上に来れば、これを貸すと吹聴している。私は苦笑したが、打ち解けた彼らと楽しそうに遊ぶチコに、思わず目を細めた。今まで何度となく会って、初めて彼の無邪気な様子を見た気がした。

十一月三日、午前七時半。キアカ村・サンファンマルコの丘――

太陽の端が微かに欠けてきた。三枚用意した観測具を、子供たち十数人が代わる代わる取って空にかざしている。チコはその輪から少し離れて、じっと村の集落を眺めている。そのどこかに、かつての生家が在ったことを、彼は知らない。午前八時、太陽の半分が影に覆われた。チコは未だぼんやり

の指し示す丘の頂へと、私は目を向けた。

「お、あれは……」

「お祈りの儀式だ。太陽が悪い魔物に食われてしまわないように、神様に祈るんだよ」

丘の山頂に、伝統的な礼服に身を包んだ三人の女性が、十字架を囲むように立っている。一人の女性が十字架の下で香を焚き、二人がコカの葉や小さな葉巻のようなロメロ、食べ物の供物を並べた。やがて祈りが捧げられ、供物に火が点けられた。刺激臭を伴う煙が周りにたちこめ、私は目と鼻を手で覆った。大地の神パチャママへの、太陽復活の祈禱の音が、丘に響き渡った。やがて煙が風に舞うと、私は手を顔から放して、子供のように膝を震わせていた。

キアカ村からラ・パスまでは、車で飛ばしても八、九時間の間程だ。

ウユニ湖畔の沿道は、未舗装の悪路が続く。腰に痛みを感じつつ、私はゴルフのハンドルのハンドルを握った。助手席のチコは、疲れたそぶりも見せず、ノートと本を出してペンを走らせている。学校で出された宿題を、鞆に入れてきたのだという。がたがた揺れる車内で、よく書き物ができると、私は呆れた。

オルコの町で食事休憩をして、再びゴルフを走らせた。

チコは宿題を鞆にしまうと、私に「相談したいことがあ

る」と言った。

「ハポネス、実はお店のばあちゃんのことなんだけど」

あの無愛想な露天商か。私は、彼女が眼病で入院してることが、聞いてない風に装った。

「ばあちゃんは貧乏で、身寄りがいないんだ。いや一人妹がいるけど、その人は足が悪くて役に立たない。ばあちゃんが入院した時は、仕事仲間の車の都合がついて、問題なかった。でも今度の日曜日は、誰も手を貸してくれない。手術したばかりで、目が不自由なばあちゃんを、俺ひとりじゃ……」

「分かった。つまり退院するのに車と人手がいるけど、他にあてがない。そうだね？」

「そう、さすがだね、ハポネス。俺が言う前に分かったみたいなのに、察がいい」

日曜日に落ち合う時間と場所を決めると、チコは安堵の息を吐いた。病院は空港とラ・パスを結ぶ街道沿いで、片道三十分ほどの距離だ。助手席をちらと見て、思わず笑いがこみ上げた。ホセが仕事用にと貸してくれた車が、ほとんど彼の御用達になっている。

「チコ、私の滞在期間も、もうひと月を切った。昨日と今日、君の故郷に近い場所を訪ねて、日蝕以外にも貴重な体験ができた。ラ・パスで知り合った誰より、君から楽しい思い出をもらった。ただ、君にお別れを言うつもりはない。

った言葉だ。訓示のような堅苦しいものではなく、実に単純な助言であった。それは慣れない異境で、予期せぬトラブルや苦境に遇った時、常に戒めにしてきた言葉である。

慌てるな。考え、判断する時間は必ずある。

危機に瀕して動揺した時、慌てて行動せず、この言葉を心の中で唱える。どんな状況でも、考える時間はあるのだと、私は自分に言い聞かせてきた。

チコとの約束の日曜日、私達はムリーリョ広場の前で出会った。

露天商の入院先は、空港を目指す道の沿線にある。公営の病院で、医療費の補助が効く反面、入院ベッドの制約で早い退院を強いられるのだという。道は日曜日で空いていたが、時折、運搬車輛が強引な追い越しをかけてきた。舗装されているとはいえ、轍掘れがひどい区間は、ハンドルが横に振られる。助手席のチコは、呑気に外の景色を見ていた。

「チコ、何度も言うがシートベルトを締める」

「わかったよ。あんまり安全運転だから、必要ないかと思ってる」

「制限速度は守るさ。君の言うニセ警官に言い寄られないようにね」

ベルトを締めると、チコはポケットから、先日貸してやった御守りを出した。ハンドルを手繰りながら、私はちら

たぶん来年も、ここに来ることになるだろうから。そうだ、いい物を見せてあげよう」

私は上着のポケットから、日本の神社の御守りを出した。外袋の金糸の刺繍を、チコは興味深げに手で触れた。

「綺麗な模様の袋だね。何が入ってるの？」

「日本の神様の、おまじないカードだよ。ある物は商売繁盛の神様。ある物は家族の安全の神様。で、これは交通安全の神様だ。チコ、私は君の友人であると同時に、地球の真裏から来た、神様のお使いだ。君の願いごとをかなえ、将来いい先生になるために、エケコの神様と、日本の神様がきつと私達を引き合わせたんだ」

チコは不思議そうに私を見た。思いつくまま投げかけた言葉を、彼はどの程度理解できたのだろう。私はその小さな手に、御守りを渡した。

「友達であり、神様の……お使い？」

「そう思ってくれていいよ。仕事の時はビジネス・マンだけど、いま君といふこの時は、神様のお使いだ」

御守りを施設の子に見せたいというので、私はOKと頷いた。夕闇がいつしか、山の稜線に影を落としている。やがてヘッドライトの先に、(ラ・パス)の案内標識が現れた。

御守り以上に、私が大切に抱えてきた言葉がある。

それは初の海外赴任の際、私が信頼を寄せる上司から貰

と助手席を見た。

「それが気に入ったようだな。よければ君の御守りにしていいぞ」

チコは顔をしかめて、いやと首をふる。

「タダで貰いたくない。そうだハポネス、久しぶりに勝負しようか」

「ええ、ここですか？ もしやまた、例のやつか」

道はコンクリート舗装の、長い直線にさしかかった。百メートル程先で、何かが道を塞いでいる。私は後続車が無いのを確認し、ゴルフのスピードを落とす。チコは得意げに「そう、例のやつさ」と手帳のページをめくっている。五十メートル手前で、私は道を塞ぐ物を何かを視認した。大きな籠の荷台の、小型トラックが立往生している。タイヤがスタックしたのか、右前輪が路肩の凹みに嵌まっていた。荷台の様子から、養鶏所の運搬車らしい。二十メートル手前で、私は更に減速した。運転手らしき男が、こちらに手を振っている。チコはそれには無頓着で、手帳のあるページを開いて、私に言った。

「よし、これがいい。でもちょっと簡単過ぎかな。まあ、ハポネスには丁度いいな」

「チコ、事故車両が立往生している。手を貸してくるからここで待て」

「え？ ああほんとだ。それにしても古い車だ。あれは鶏



の籠かな？」

車を手前に停め、チコを助手席に残して、私は車を降りた。荷台に近づくと、つんとアンモニア臭がした。インディアの男はケチュア語でまくしたてるが、当然理解できない。身振りからして、車を後ろから押してほしいようだ。男が運転席に乗ると、私は後方へ回った。旧式のエンジンがおお、と唸りを上げた。荷台を両手で支え、ちらとゴルフの方を見た。一瞬、チコにも手伝わせようかと考えた。しかし足元で、タイヤの空転する振動を感じた。反射的に私は腕に力をこめ、荷台を押しした。タイヤは轍を噛み、少し上がりかけては、また元の位置に戻った。めいっぱい力をこめ、二度、三度と試みた。惜しい所まで行くが、タイヤは上がりきらない。やがて額から汗がにじんだ。

その時私は、トラックのエンジン音で、後方から迫る音に気づかずにいた。四度目のトライの後、やはりチコの手を借りようと振り返った時、それはもうゴルフの間際に迫っていた。ぎらぎらと光沢を放つ巨大な影。不覚にも私は、その迫りくる危機に、全く無防備でいたのだ。

「わ！ チコ、危ない！」

碎石を積んだ大型のダンブが、ぼおお、と警笛を鳴らした。なすすべも無かった。壁のような鉄の巨体が、斜め左に旋回しかけた。ブレイキの悲鳴と車体の軋み。轟音とともに車体が、小さなゴルフを呑み込み、その勢いのままト

打ちのめされていたのだ。

目が醒めたとき、そこが病院のベッドであると、すぐに把握できなかった。

実況見聞を終えた警察官の職務質問を、私は病室で受けた。トラックと碎石ダンブの運転手は、別の病院に搬送されたと聞かされた。夕方ホセとミゲル、翌日リマ支局の田中が、私を見舞いに来た。その時彼らとどんな会話をしたのか、私は思い出せない。憶えているのは、最初の主治医の往診で聞いた、友の死の報だけである。否、もう一つ記憶しているのは、警官の提示した現場写真の一枚だ。車体が原型をとどめぬ程に潰れたゴルフ。チコの遺体を搬出した後に撮られた写真である。

病室での十日間、私は面会人の前でも、医師の問診中も、相手に感情を見せぬように努めていた。誤解を恐れず言うなら、事実を受け入れる心の整理は、高地の低酸素順化に似て、間断ない苦痛にゆっくり同化して行く過程に似ていた。夜、私は何度も目覚め、記憶のピースを拾うように、事故の場面を回想していた。

眠れないのはある意味、夢を恐れていたのかも知れない。夢の中でチコと会い、ふいに覚醒することへの失意。夜中、喪失感と孤独にさいなまれつつ、いつしかその感覚すらが、自分を癒しているかのような錯覚に変わる。夢枕のような

トラックをも撥ね飛ばした。

私は本能的に、右の路肩へ飛んでいた。地面に脇腹を痛打し、弾むように草むらを転げた。大きく傾いたダンブは、砂利を撥ね上げて道路を抉った。衝撃音で耳がやられ、息が止まりかけた。砂塵と碎石が舞い、石つぶてが背中と足に当たった。もうもうと砂煙が、私の視界を塞いでいるようだった。ようだった、とはその時の記憶が今では曖昧なのだ。

私はべたりと地面に伏して、ただ朦朧としていた。喉から胸が焼けるようで、激しく咳き込んだ。どこからか、鶏の鳴き声が聞こえた。

砂と血の混じった口をもごもごさせ、たぶんあの時の私は、何度もチコの名を呼んでいた。彼と彼を乗せたゴルフ、養鶏所のトラックと運転手。身動きままならない私は、苦痛と混乱の中で、周囲の状況を全く確認できずにいたのだ。時間の経過とともに、友の安否への思いは、行き場のない焦りへと変わっていった。

やがて救急車のサイレンが聞こえ、私は目を潤ませ、ああこのまま死ねたらな、と思った。救命センターに一人で搬送されるより、ここで死ぬ方がいい。それはおそらく、絶望からの失意ではなかった。絶望よりはるかに酷い現実から、私は逃れたかった。おそらく「どんな状況でも、考える時間はある」という信念が、脆くも崩れ去った現実に、

幻影は見えない。たぶん私には、そうした情操や感性が希薄なのだろう。

ただ、唯一私が感情を昂らせたのは、施設長のハンナの見舞いを受けた時であった。彼女は油染みの付いた、メモの切れ端のような紙を、私に渡して言った。

「これは、チコがその手に固く握りしめていた、手帳のページ一枚です。彼は事故の直前、あなたに何かを意図して、このページを開いていたでしょう」

私はそれを、枕の下にそっと入れた。あえてそれを見たくなかった。彼との最後のやりとり、その記憶を今さら、掘り起こしたくはなかった。私は彼女の視線を感じたが、それを避けるように俯いて、言った。

「チコに、シートベルトをしると、私は命じました。彼がベルトをしなれば、外に投げ出されて、もしかしたら、怪我で済んだのかも……」

ハンナはいつかの、鏡のような瞳で私を見つめ、そっと手を握った。

「そんな風に、自分を責めないでください。もともと彼は自分の意志であなたに頼んだことです。あなたも、他の誰も、咎めを受けることではないのです。カガワさん、主は全てを見ておられます」

痛いほど強く、ハンナは私の手を握ってくれた。その時初めて、両目から涙が溢れた。誰のためでもなく、その時

純粹に私は、ただ自分のために、涙を流していた。  
退院を二日後に控えた日、ハンナは再度私を見舞った。  
チコが彼女の属する教会の墓地に埋葬されたことを、報告しに来たのだ。墓地の地図と写真を、私は受け取った。その時不思議にも、私は我が身に降りかかった事実を、静かに受け入れようとしていた。

——十一月某日、帰国の四日前

その日の夕方、私はハンナの教会とチコの墓を訪ねた。それからホセの家を訪問し、あらためて車のことを詫びた。実はあの日、ホセは車を貸与したことに責任を感じ、私を見舞った後、露天商の婦人を自宅へ送迎してくれたのである。

「あなたの友情を忘れません。まだ不確定ですけど、来年また、こちらへ来ることになるかもしれない」

「カガワ、その時は星空を看に、ワインを飲みましょう。お元気で」

「これからキアカ村を訪ねます。思い出の地、サンファンマルコの丘で、祈りを捧げに」

「……そうですね。この時節夜は冷えこみます。体にお気をつけて」

バス・ターミナルまで、ホセが車で送ってくれた。夜九時発のウユニ行き夜行バス。私は後ろの二列席に、旅行鞆

を置いた。

キアカの再訪を思い立った理由は、あの朝私が丘の頂で感じた、人の温もりのような暖かな優しい風だ。十一月二日の万霊節、来世へと旅立つ母の魂は、チコのため翌日の日蝕の朝まで、現世に留まっていたように、私は思う。日蝕に目もくれず、チコが村の集落を見ていた時、魂は風に乗り、そっと彼を包みこんでいたのだ。

牧童の村、パンバアウヤガへと、バスはひた走る。翌朝、明けの曙光とともに、広大な枯れ草と岩の原野が、眼前に広がる。席の窓側から通路側に移り、私は鞆からチコの写真と、ひげ親父を取り出した。

二つを窓側席に置いて、私は地図を広げた。乾燥したアルティプラノの大地。西にはサハマ峰、東にはレアル、キムサクルスの山脈が続く。山の稜線には、ほのかに朝霧がかかっている。ふと西の空に、黒い鳥の影をみた。コンドルが羽根を広げ、滑空しているのだ。私は席に置いた写真を、空の方に向けた。

「チコ、見えるか。この空も山脈も、お前が産まれた土地へと続いているんだ。この大地の恵みが、これからもずっと、ラ・パスの人々の生きた糧になるんだ」

バスはウユニ塩湖へと、更に南下して行く。私はポケットから、ハンナが届けてくれた、チコの手帳の紙片を取り出した。

「そっ、だ、忘れるところだった。お前とのあの日の勝負、ずっとお預けだったな」  
手書きのスペイン語。彼が最後に開いた手帳の文を、私は目で追った。

Tres tristes tigres comen trigo en un trigal.  
(三頭の悲しい虎が、小麦畑で小麦を食べる)

私は目を細め、その文面をなぞっていた。「早口で三回、しくじったら俺の勝ちだ」

そう言いたげなチコが、隣の席で不敵に笑っている。

「チコ、おまえが欲しがった日本の御守りは、あの事故で失くなってしまった。おまえが勝っても、あげる物はないけど、いいか？」

その時ぶるぶると、ひげ親父が震えた。バスがウユニ湖畔の、未舗装路に入ったのだ。やがて前方に、純白の世界が開けた。面積一万二千平方キロの、広大な塩の結晶。ウユニの白い絨毯を前に、声を失った私は、チコを胸にかき抱いていた。

(「空とぶ鯨」15号より改題のうえ転載／原題「三頭の悲しい虎が、小麦畑で小麦を食べる」)



辻村仁志

つじむらひとし

- 1959 東京生まれ 埼玉県在住
- 現在 さいたま文藝家協会会員  
同人誌「孤帆」「空とぶ鯨」同人
- 2013 「戯曲-幻想夜話墨堤」が第44回  
埼玉文芸賞準賞
- 2015 「ゼロ時計」がまほろば賞優秀賞

文芸同人

鯨

第15号

空とぶ鯨

神奈川県

真夏の合評合宿

「空とぶ鯨」同人にとって、毎年一回晴海で開催される夏合宿（関東ミニ文校）は、関東、中部、近畿、四国方面からの文学仲間が集い、さながら学友の同窓会の様相を呈している。また会員の約八割が、大阪文学学校のチューター、生徒、OBであることから、文校関係の非同人有志も参加し、毎回熱い論戦が交わされる。

通常、掲載費を書き手が負担する同人誌の場合、いかなる批評、苦言を受けても、作者の思惑、意向が何より優先される。一言でいえば、作品は作者の書きたいように、ある程度自己本位に書いて良いことになる。

しかし「鯨」の同人はその点みな、謙虚で律儀に批評を受け止める傾向にある。（逆に、もう少し頑固に尖った作品があつてもよいかも知れないが）

関東ミニ文校の合評をもとに、各自はそれを反映させた第二稿を仕上げる。原稿は編集委員のチェックが入り、作者は再度見直し、修正をする。そこまで推敲されたものが印刷用のゲラになる。そして最終段階の著者校正を経て、

初めて作品となるのだ。  
編集委員の裁量も問われるところだが、こうした地道な努力と研鑽によって「空とぶ鯨」は刊行される。テーマ、舞台設定、作風はさまざま。その自由な気風を持って「継続は力なり」の志で、これからの文学の海原を駆け、大空を飛べるように、地道に号を重ねて行きたい。

「空とぶ鯨」編集部／辻村仁志

「三頭の悲しい虎が、小麦畑で麦を食べる」

なに？ なに？ と、この長つたらしいタイトルを見た  
ら、誰もが耳をそばだてる、いや、「目」をそばだてるの  
ではないだろうか。そのうえ、意味がすぐには呑み込めな  
い。頭にスツと入らない。三頭の悲しい虎？ 虎は吠える  
ものではなかったつけ？

ところがこの不思議な魅力のある小説が、名誉ある「ま  
ほろば賞」の推薦作に選出されたのである。作者は辻村仁  
志氏。昨年も別の小説で推薦作に選ばれている。昨年に引  
き続き今年も選ばれたということは、同人としてもこの上  
もない喜びです。選考委員の方々には、心より感謝してお  
ります。ありがとうございます。

辻村さんは、「空とぶ鯨」の同人であり、事務局長です。  
ハードな勤務の間に、小説を書き、「空とぶ鯨」の事務局

長までやってくたさる。

急に丁寧になってしまったが、ダメ編集長としては、原  
稿チェックをしてくれる五名の編集委員に対すると同様  
に、大いに頼りにしている人なのです。

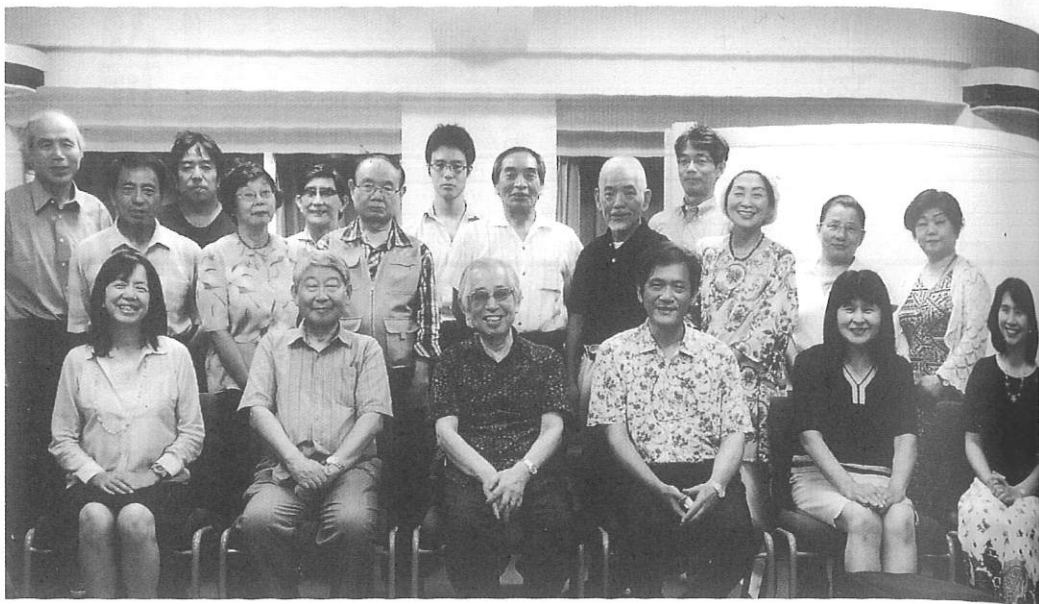
「できる人」というのは、えてして周りの人間もできるは  
ず、と錯覚している。世の中にはそういう人が結構多い。  
だから周りの人にも何の躊躇もなくむずかしいことを要求  
する。それが不首尾に終わると、なんでできないんだよ、  
とでもいうかのように顔を引きつらせる。

ところが「できる人」であるにもかかわらず、辻村さん  
は温厚です。そもそも難しいことを人に依頼することもな  
い。それでいて同人を率いていく牽引力があります。

毎年八月に開かれる真夏の合評合宿では、毎回二〇名前  
後が集結します。参加者が前もって提出した作品をチュ  
ーター、参加者で合評します。そこでの意見をベースに各作  
者が自作に手を入れ、書き直したものが「空とぶ鯨」に掲  
載されるのですが、合評時に緊張が走るがあります。  
厳しい意見も飛び交う中、辻村さんはその牽引力で、多様  
な意見の着地点をさぐってくれます。

「空とぶ鯨」になくはならない人です。

「空とぶ鯨」第15号には最後の方に「14号へのお便り紹介」  
があります。同人の森ゆみこさん「蘭ごもり」、市毛孝二  
さん「夏」、石川山人さん「千宗旦夜話 宗旦無残（前）」



晴海での夏合宿

# エミール・ガレ Emile Galle

## 藤文ランプ



木内是壽氏寄贈

まほろば賞も今年平成二十七年で第9回を迎えます。このたび前年に続き木内是壽氏の御厚意により、まほろば賞副賞に特別記念品としてエミール・ガレのランプの復刻品を御寄贈いただきました。エミール・ガレの幻想的な色彩表現と造形美の手摺のままで再現した「アール・ヌーヴォー ランプ」です。三色三層に重ねたアール・ヌーヴォーの代表作。幻想的な風合いが蘇ります。木内氏の「全国同人雑誌の小説創作に勤しむ方々への励ましになれば」というお気持ちを今回もあたたかくいただき、第9回今回の優秀作六編のなかから選ばれた最優秀作品まほろば賞受賞者に贈呈させていただきます。

全国同人雑誌振興会

# 第9回まほろば賞特別記念品

らの作品に識者の方々からお褒めの言葉をいただきました。また、地場輝彦さんの小説「瑞穂の奇祭」が二〇一四年刊行「現代作家代表作選集 第四集（鼎書房／勝又浩編）」に掲載されました。登芳久さんの著作集の刊行も予定されています。現在、編集中です。

これらは辻村さん同様に、同人の一人一人が「空とぶ鯨」になくってはならない人たちであることを、証明してくれています。嬉しいことに新メンバーも続々と増えています。「三頭の悲しい虎が、小麦畑で小麦を食べる」をご選出いただきまして、改めてお礼申し上げます。「空とぶ鯨」も地道に号を重ねてまいりたいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

（文芸同人「空とぶ鯨」編集部／田村けい）

### 空とぶ鯨

〒二三〇・〇〇四一

神奈川県横浜市鶴見区潮田町二・一二二・一

田村けい

TEL045・504・1840



木内是壽  
Kunishi Yoshitaka

相続百景

相続版『大往生』  
遺産相続をテーマにした初の小説!

文芸社◎定価(本体1,200円+税)

# 二の糸

## 市川しのぶ

一管の笛の音が暗くなった場内いっばいに、ひとときわ高く響き渡る。細くて小さな楽器にもかかわらず、その音は一瞬にして、千人近くの観客に厳肅な静寂をもたらす。吹き手は一息の続く限り小さな穴へ、その魂を吹き込む。笛の名手といわれている鳴物界の重鎮は、最初の高い音の後、静かに飄々と吹く。笛音は会場にいる全員を幽玄の世界へ引き込む。その音の中へ弦楽器の三味線が入ってくる。一の糸から二の糸へ、そして三の糸を一度強く撥で弾いた後は、華やかな長唄特有の『出』となる。創作新曲『四季の宿』の『桜の段』である。と同時にパッと照明が付き、舞台はまばゆい明るさに照らし出される。会場の者達は華

やかな長唄三味線の演奏会へ、いやが上にも引き摺り込まれる。雑壇の最上段には唄方の二十人。中段には三味線方の二十人。三味線二十挺での新曲構成は珍しい。一番前の緋毛氈には、出囃子の鳴物連中が並ぶ。下手から太鼓一名。大鼓二名。小鼓六名。一番上手には笛が一名。総勢五十名の演奏会である。

丸い木の撥二本で叩く太鼓の音は人々の鼓膜へずんと響く。右指にはめた爪で叩く乾いた高音の、大鼓の音は高い天井から響き帰ってくる。もちろん小鼓の冴え渡った音もである。一番小さな打楽器でも小鼓六名の打つ音は、そのが内輪では本名の俊之で呼ぶほどの、お互いに長い付き合いである。

存在を充分に誇示している。長唄は三味線と唄と出囃子としての鳴物とで構成され、さらに陰囃子として下手の御簾の中で、鉦や大太鼓が加わることもある。舞台中央の立三味線は俊之が務めている。家元は上調子として一番上手である。今回は立三味線を俊之が弾くというところで、事実上の次期家元の座が、決定されたような記念公演となった。

雪乃が舞台下手の袖に立ち、俊之の横顔を見続ける。彼は師範として立派になった。次期家元としての貫録も充分に出て来た。このまま歳を重ねれば申し分ない。

雪乃の横では俊之の妻である光子が、夫の晴舞台を見つめている。舞台上の全員が今日は新調した流派の紋付き袴姿である。漆黒の五つ黒紋付きに、細かい縦縞の仙台平の袴。舞台上を男性の演奏者のみでまとめたのも壮観である。先程俊之は舞台袖にいる二人の前を、仙台平の衣擦れの音を残して舞台へ出て行った。雪乃は絹袴の出すその音が好きだった。

「俊之さん、立派になりましたね」

雪乃が独り言のように言う。

「お陰様で。これであの人ももう、金沢へ帰るとは言わなくなるでしょう」

舞台脇の薄暗がりの中で、光子が微笑むのが分かった。二人とも人前では俊之のことを師範としての名で呼ぶ。だ

雪乃が高校を卒業し、金沢の津田流支部へ内弟子として入った時、俊之はまだ小学校へ入学したばかりの、頬つべたの赤い、大きな瞳の瘦せた少年だった。光子はその頃もう、家元の娘として子供用の短袴三味線を、見よう見まねで弾いていた。俊之もちろんすでに小さな手に、三味線の棹を握っていた。

背筋をびんと張った俊之の右手の撥が、下から上へ力強く弾かれた。それが合図となって三味線の調べは、『出端』からしつとりとした艶のある音となり『螢の段』になって『口説き』に変わる。

この新曲が出来上がるまでに二年以上かかった。長く引き継がれてきた古曲を弾きこなすのも、修行のひとつであるが、創作曲を創り出すのも同じである。新曲を手掛け始めると、誰もがそうであるように古曲と新曲のギャップに陥る。俊之も例外なくそうだった。彼の眉間の二本の縦皺が、ますます深くなっていくのに気づきながら、雪乃はそれを正面切って注意出来なかった。こういうことを乗り切って行かなければ、三味線奏者として一人前にはなれない。

曲は長い『口説き』に入っている。唄方の聴かせどころである。弾き手は唄い手の艶のある声と、うまく調和して

ゆかなければならない。邪魔をしてもいけないし、もちろん演奏が早過ぎても遅れてもいけない。俊之の立三味線一艇のみで曲は続く。会場の者達は固唾を飲んで彼の手元を見つめる。

雪はひどくなるばかりで止みそうもない。音声を絞ったテレビでは、新幹線に遅れが出てるとテロップが出ている。雪乃は何度も雪見障子を上げて、廊下の向こうのガラス戸越しに庭を見る。雪灯籠の上にはすでにかなりの雪が積もっている。ケイタイが震えた。

「タクシーがこの雪で、そこまで登って行くのを渋っているんだ」

挨拶も、昨日までのあわただしかった発表会のねぎらいも、何もない言葉が聞こえた。

「私が登ってくる時でも、もうかなり積もっていましたから」

そのあと二人の間で言葉が途切れた。

「無理なさらないで。新幹線が動いているうちに、お帰りになった方が……」

相手は逡巡している。

「では」

雪乃の耳へ相手が先にケイタイを切る音が聞こえた。見事な欄間の透かし彫りの横に取り付けられた、不釣り合い

な空調機から、僅かに単調な音が聞こえる。三味線の糸を新しく変えた時に、爪弾いて合わせる音に似ている。フロントへ電話をする。しかしもうタクシーを呼ぶのは無理だという。山の上の宿までこの雪の中を、迎車してくれる運転手はいないだろう。宿の車も出せないと申し訳なさそうに言う。

ガラス戸の向こうの山桜の枝に積もった雪の塊が、大きく砕けて落ちた時、女将が襖の向こうから顔を見せた。

「お連れ様はいらっしゃらないとか……」

「はい、連絡がありました」

「駅までお送り出来るといいのですけれど、係りの者が言いますのには、もう山越えは無理だと……」

「今夜は、私独り泊めて頂きます」

「では、お食事をお持ち致しますね」

「あまりお腹も空いていませんで、お茶漬だけで結構ですから……」

「かしこまりました」

何時もは二人でゆっくり日本酒を飲む。何も改めて話すことはないが、それでも互いの生活にあったことなどをぼつぼつと話す。

俊之は津田流長唄三味線の金沢支部長の二男として産まれた。雪乃が支部長の家へ内弟子として入った時、支部長の妻は亡くなっていた。内弟子といえは聞こえは良いが、

何から何までしなければならぬ、お手伝いのようなものだった。俊之の上には歳の離れた長男がいた。他にも男の内弟子が住み込んでいたし、通いの弟子も多くいた。雪乃はその食事を作り、掃除をし、その合間に師匠から手ほどきを受けた。そして初歩の通い弟子に教えた。俊之にも忙しい師匠の代わりに教えた。子供用の短袴を抱えて雪乃の前で、びよこんとお辞儀をする俊之は可愛かった。

彼は小学校から中学に通うようになると、雪乃の作った弁当を持って通った。高校もそうだった。そして、東京芸大へ入った。東京での勉強と、三味線の修行をする俊之のために、雪乃は荷物を作って送り出した。彼女が入った時点で、いづれ長男との結婚の話が出るだろう、と一部の人は思っていたらしい。だが長男も雪乃もその気持ちにならない内に、家の中の状況が変わった。やがて長男は自分と相手を見つけて結婚した。そして家から出た。居にくかったのだらうと思われた。二人の息子が出家家は、一挙にがらんとした空気だった。だが雪乃が家を出ることはなかった。支部内を預かるのに必要な存在となっていたのである。そうかと言って、支部長とは歳の差もかなりあってか、入籍という具体的な話は誰の口からも出なかった。

雪乃の父は津軽三味線の名手だった。太棹から出る力強い音を聞いて彼女は育った。父は彼女に太棹三味線をやれとは言わなかった。雪乃はその地に太く激しく響く音より

も、細棹三味線の音を何故か好んだ。母親が試しに習わせてみると、確かに天賦の才があった。見る見るうちに彼女は地方の選抜を勝ち上がって、全国大会でも賞を得るほどの腕の冴えを見せた。それを金沢支部長が認めていたこともあり、両親が不慮の事故で亡くなった時、彼女を引き取ったのである。

一度に両親を亡くした時、雪乃はまだ高校生だった。親戚や両親の太棹仲間達が、彼女の将来に責任を持つと申し出る者がいた。だが雪乃自身もう高校生なのだから、一人で生きてゆくつもりだった。それで金沢支部長の内弟子に決まったのだ。支部長宅は当時、家の中の細かいことをする女手も必要としていたし、雪乃の方もさらに三味線を続けたいということで、だった。

俊之の弾き方は平凡だった。特別上手くもなければ、習いに通って来る他の子供達に劣るといふこともなかった。父親は雪乃にも俊之にも厳しかった。父親が痲癩を起して飛んできた撥を一度交わし損ねて、俊之は頬に青痣を作った。その時は雪乃が、夜中寝ないで湿布をし続けた。

お茶漬だけとはいかなくて雪乃の部屋へ、それなりの料理が運ばれてきた。そして女将が酒の用意を盆に載せて持ってきた。

「あら、お酒は頼んでいませんが」

「良いではありませんか。今日は他にお客様もありませんから、私がお相手させて頂きますわ」

雪乃の母親位の年であろう女将は、彼女の盃に熱燗の酒を注ぎ、

「ご迷惑ですかしら」

と明るい笑顔を浮かべる。この宿へ通うようになって何年になるのだろうか。それは年に数回、俊之と逢瀬を重ねるようになってからの年数に等しい。いつもこの宿で逢う訳ではなかった。出稽古先や、各地での演奏会の後先に二人の時間が合った時だった。二人とも忙しい身であるし、一方は金沢の家にいるし、一方は東京の家元の所へ通っている身である。金沢の街で逢うことも、東京で逢うこともかなわない身同士である。

「御酒はどちらが、お強いのですか」

女将は酒の肴を見繕って持ち込み、寛いだ雰囲気を上手く作ってくれる。地味なおオシマをゆったりと着ている女将に、自分も何時かはこんな着物の着方をしたいと思う。彼女は着くずれすることがないように舞台にあがる時も、稽古日の時もきっちりと襟元を詰めて着る。

「私の方が強いかしら。でも正体がなくなるまで飲んだことはいないから、分らないわ」

「それでしたら、今日は充分にお飲みになってみたらどうですか。お止めはしませんから」

女将は口元を押さえて笑う。雪はますます強くなっているらしい。

「列車、動いているかしら」

もう東京に戻り着いているであろう俊之のことを、雪乃は思う。

「大丈夫でございますよ。新幹線は雪に強くなっておりますから。それよりもこの宿の方が心配です。停電になるかも……」

女将は新幹線がすぐ停まることを知っている。しかし、雪乃の不安を増長させるようなことは口にしない。この宿に二人でいる時、停電になったら俊之はどうするだろうか。何年も前のことを思い出す。それはまだ俊之が中学生の時だった。古い劇場で弾いた時だった。雪乃も同じ曲に出ていた。地方歌舞伎の演奏をした時、何故か花道で弾かなければいけなかった。舞台が狭かったので、そういう演出になったのだろうか。その場所へ行くためには奈落を通る。奈落とは舞台下から、観客席の下を潜っている細い暗い通路である。現在ほどの劇場も、照明はしっかり点けられていて、足元が危ないようなことはない。だがその頃はまだ懐中電灯がいるくらい暗かった。楽屋から奈落へ降りる狭い階段の途中で俊之が立ち止まった。進もうとしない。

「雪乃は怖くないか」

「何を、ですか」

「何となく……」

「何を言っているのですか。さあ、行きますよ。出に遅れます」

昔から奈落には様々な言い伝えがある。立女形が主役を取られ奈落で首を纏ったので、その幽霊が出るのか。今はむき出しのコンクリート造りの所が多いが、昔は木造の芝居小屋がまだあって、梁など縦横無尽に丸太などが出ていて、首を纏るには最適の場所であるから、こういう噂がまことしやかに流れたのだろう。突如水が地面から湧き出るとか。火の気のない所なのに、フアフアと赤い玉が飛ぶとか。どの劇場も古ければ古いほど、そういうネタ話には事欠かない。大道具方も初出演の者達に、わざとそういう話をして怖がらせる。それらの話を何とも思わない出演者もいれば、異常に怖がって奈落を絶対に通らない者もいて、芝居の筋が通らず手こずることさえある。

俊之は三味線を左手に持ち、右手で雪乃の手を握った。雪乃は驚いた。小学生でもあるまいし、と思った。あれから何年になるのだろうか。今の俊之は奈落へ一人で降りられるのだろうか。あの時、急に何故立ち止まったのか。何かを見たのだろうか。何かを感じたには違いない。聞いてみたい。今も、二人なら降りられるのだろうか。それを聞くことはもう出来ないのかもしれない。

「お二人は何時からのお付き合いでございますか。若お家元とは金沢時代から？」

その女将の言葉に雪乃の盃が宙に浮いた。聞き方によっては、どちらにも取れる微妙な言葉である。彼女の顔色に女将は素早く言い直した。

「あらっ、ごめんなさい。つい、私、そんなつもりで申し上げたのでは……」

雪乃は大きく首を横に振った。

「もう、長くお世話になっておりますものね。こちらへ初めて伺った時は、何年前だったのでしょうか。最初から私達のことはご存知でしたの」

「いいえ、東京の若お家元だと気が付きましたのは、私がお三味線を習っていたことがございましてね。それで機関誌のお写真で。気が付きました時は、それはもう……」

「驚かれたでしょうね。金沢支部の女と東京本部の次期家元と騒がれている男と。でも、少し訂正すると、まだ正式には若家元ではありませんわ」

女将は大袈裟に両掌を横に振る。

「あの頃、私は、てっきり、お似合いの……」

この話題は、この場に似つかわしくないと二人とも気づいて、それぞれに言葉を中止して、盃の酒を飲み干す。強い風が出てきたせい、外では吹雪になったようである。

初めてこの宿へ二人で来た日のことは、今でもはっきりと覚えている。

まだ二人とも若かった。東京での出稽古の帰りだった。夕方何時ものように、金沢へ帰るために特急列車に乗った。自由席でも随分空席が目立った。連日の東京での稽古の煩わしさからやっと解放されて、湧き上がった疲労が体中に広がっている。どんなに疲れていても、それを顔に出すことは許される状況ではない。そういうことを内弟子に入ってから学んだ。やっと一人になったことで、疲れがどっと体中を駆け廻って、外へ勢いよく飛び出してくる。ああ、これでゆっくりと、終点まで眠って行くことが出来る。列車が発車すると、そう思って目を閉じた時だった。揺れる通路を歩いて来る者に眼がいった。俊之だった。さつきまで稽古をつけていた彼が、座席に座っている者の顔を、一人一人確認しながら前方から近づいて来る。

「俊之さん」

ほとんど同時に二人がお互いの顔を確認した。彼はびつしよりと汗をかいていた顔を、一瞬強張らせると何も言わずに、雪乃の隣へ勢いよく腰を降ろした。

二人とも無言のまま一駅を過ぎた。再び列車が走り出したとき、雪乃が口を開いた。

「東京から逃げ出して、金沢へ帰るのですか」

雪乃は小さい時から音を聴き分ける能力に長けていた。

歳を過ぎた青年が、年上ながら小柄の雪乃の前に正座して、教えられる姿は少し滑稽だった。幹部連中がその姿を見て苦笑しても、俊之は金沢時代から続いている、その稽古を平然と続けていた。何事にも物怖じしないし、おっとりした性格は大きくなっても変わらなかったが、何よりも三味線に対しての向上心がないのが、雪乃にとってはもどかしかった。

「今の所、もう一度」

「いいよ、雪乃。もう諦めた。お前のように弾けないよ」

「いけません。もう一度弾いてみて下さい。私は今あなたを、家元の代理として教えています。甘えてはいけません」

声は小さく言葉付きは優しくしたが、彼女の教え方は厳しい。切れ長の瞳が真っ直ぐに俊之を見つめている。俊之の癩癩玉がとうとう破裂した。

「もう僕は何でも弾けるさ。娘道成寺でも、鏡獅子でも、お前の言った曲を何でも弾いてやるよ」

「譜面通りに弾ければいいというものではありません。あなたは小さい時からやる気がありません」

俊之が三味線を投げ出すと、撥を投げつける。雪乃へ当たりはしないように投げてはいるが、もし尖った部分が当たったら大変なことになる。

「何てことなされるのですか。お三味線と撥はあなたにとつて命より大切な物ですよ」

それは父からの遺伝かもしれないが、彼女が才能をあらわしたのは細棹ほこざらだった。内弟子に入って直接教えることが出来る、その腕はさらに上達し、年数僅かにして師匠の代理が出来るほどだった。

それに引き換え俊之は、何でも全てのことに對して普通の子供だった。父の三味線の腕を強く受け継いだのは長男の方で、亡くなった俊之の母親は、長唄の唄手としての才能があったものの、それも受け継いでいないようだった。どちらかといえば正座をして、三味線を弾いたり唄ったりするよりも、外で棒切れ片手に走り回る方が、似合っているような子供だった。

俊之は隣のシートに座ったまま、依然として無言でいる。次第に窓の外の景色が暗くなっていく。

「僕はどうせ、二の糸さ」

やっと言葉を出した俊之へ、雪乃がゆっくりと顔を向けた。

「どういうことですか」

俊之はまた口を強く結んだ。

東京での出稽古は気を使う。午前中は家元の前に座り直接教わる。しかし家元は忙しいので、ほとんどの稽古は師範の誰かが行う。午後になると立場が反対になって、雪乃は教える方になり、通ってくる初歩の弟子達に教えることもある。俊之はその頃、まだ教える方ではなかった。二二

俊之は顔色を変えた雪乃に對し、さらに憎まれ口を叩いた。

「金沢へ帰れ。東京へ二度と来るな」

「言われなくても私は帰ります。でも、あなたは帰られないんですよ」

雪乃が諭すように静かに言う。

「お父様に言われて私は毎月こちらへ出てきます。早くあなたを一人前の三味線弾きにしてくれと……。東京で修行したいからと、大学を出てからどうしても、金沢へ帰らなかったお人が、今更尻尾を巻いて帰ることが出来ますか」

それを言われると、俊之はもう次の言葉を出すことが出来ない。何時までも羽を伸ばしたかっただけの理由で、東京に残っただけのことだった。

「三本の糸を撥ではじけば音は出ます。譜面通りには確かに弾けています」

「それで何が悪い。正確さじゃ、お前に負けないぞ」

「その言葉は小さい時に、何度も聞きました」

雪乃の声は小さいが、俊之の声が稽古場の外まで聞こえたらしく、廊下の角でどうなることかと、他の門弟たちが固まっている。

「あれから十年以上も経っているのに、僕はまだお前の前に正座して、稽古しなくてはならないのか」

「悔しかったら私を踏み台にして、日本中の長唄三味線の



方から誉められるような、弾き手になって下さい」

「お前は金沢の鬼だ。早く帰れ」

「あなたの為なら、私は鬼にもなります」

稽古終わりの礼もせず、俊之は立ち上がり、稽古場を出て行った。雪乃はきちんと後片付けをしてから、家元宅を辞去し列車に乗ったのだった。

今その俊之が雪乃の隣にいる。

「一の糸は家元だ。三の糸はお前だ」

「二の糸も、なくてはならない大切な糸です」

三味線は天神、棹、胴そして糸から成り立ち、棹の先に天神があり、そこから三本の糸が出ている。一番上の糸は一の糸と呼ばれ、太くて低音を受け持つ。真ん中が二の糸。そして三の糸は細くて、一番使用頻度が高い。それぞれの糸を左指の腹で押さえたり、弾いたりし、右手で撥を持ち、天神から伸びる三本の糸を、胴の所ではねあげたり、押さえたりして弾く。左手の指の押さえ方がほんの数ミリ違っても、強くても弱くても出る音は数倍違う。三味線を習い始めた時は、爪は割れ、指先は破れて血が出る。右手にはタコが出来る。たった三本の糸を右手の撥と左手の指とで、多種多様な音色を出すことが出来る三味線は、日本独特の楽器である。外国にも似たような弦楽器は沢山ある。中国には馬頭琴や二胡がある。ギターもそうであるし、チェロも弦で音を出す。その弦を弾くのが右手の指であったり、

弓であったりの違いはあるが、日本の三味線は弦をはじく撥そのものが美しい。稽古用はプラスチックや木であるが、鼈甲や象牙の撥になると、数百万もする高価なものもある。長唄三味線そのものは、最初江戸歌舞伎の音楽として独特な発達をし、その後明治になるとお座敷長唄という部類も生まれた。

「二の糸も大切な糸です。もし二の糸がなかったら、日本の三味線は成り立ちません」

雪乃は同じことを俊之に強く言う。

次の駅の発車間際、俊之は突然彼女の腕を掴むと閉まりかかるドアへ突進した。抗う間もなく雪乃は列車から降ろされた。列車が去った後、ホームで二人の間で争いが起こった。しかし小柄な雪乃が大柄の俊之に敵うはずはない。それにホームには人影があった。争っている所を見とがめられるのはまずい。駅前の客待ちのタクシーに彼女を押し込めると、俊之は運転手に告げた。

「泊まることの出来る静かな所へ」

それを聞いた雪乃は抗うのを止めた。言い出したら聞かない俊之を、彼女は昔からよく知っている。

あの日から気の遠くなるような長い年月が過ぎている。外は激しい吹雪になった。風の音がする。部屋の中まで冷たい風が入ってくるはずはないのに、床の間に生けられた紅椿の、小さな花がほろりと落ちた。

この宿で何回逢っただろうか。最初の夜は、山桜の花びらが開けた窓から散り舞ってきっていた。そして次には、庭に飛び交う螢を見た。春に美しい花を見せていた桜が、夏の青葉から桜紅葉になり、激しく散り落ちるのを、二人して眺めていたこともある。酒の入った俊之が三味線の譜を口ずさむ。唄方は舞台に出る時、歌詞の書かれた和本を見台に載せ、それを見ながら歌うが、三味線方は左手の指、右手の撥の叩き方をすべて暗記して弾く。それが譜に書かれている口三味線というもので、チンとかチリとかシャンである。

「あ、そのところ違いますよ。『秋の色種』の三下がりの所は、こうです」

雪乃が思わず俊之の間違いを正すと、彼は口を失らせて、「もう……、こんな時にまで、師匠ぶるなよ」

と、隣に座っている彼女の頭をコツンと叩く。

「覚え間違いの所は早く直さないと、舞台に出た時、ついそのまま弾いてしまいますから」

二人は縁側から庭の木の病葉が散り舞うのを見ながら、ゆつたりと会話をする。

「雪乃と僕とどっちが多く曲を覚えてるかな」

「さあ、どうでしょうか」

「よし、当てっこだ」

俊之が秋の曲を口にする。右手も左手も独りで動いて

いる。幾つ彼がエアース三味線を奏でて、雪乃はすらすらと答えた。

「負けたあ、お前は凄いなあ。自分の弾ける曲何曲あるか、数えたことあるかい」

「さあ、俊之さんよりは長くやっているんですから、当然多いとは思っています」

酒が切れた所で二人は縁側のガラス戸を閉め、奥の部屋へ移った。すでに夜具が整えられていた。

冬は炬燵に足を入れて、熱い日本酒で身体が温まり、金沢時代の思い出話を花を咲かせたこともある。俊之の中学時代の弁当には、時々焦げた卵焼きが入っていたこと。それを級友にいつもからかわれていたこと。雪乃が入浴している時、悪友達とそっと覗いて、湯を思い切りぶっかけられたこと。あの頃は男と女ではなかった。年端のゆかぬ少年と、高校を出たての若い女の子だった。そんなことを、少しの酒で酔って話す俊之は、楽しそうだった。

毎年山桜の花を見る訳ではなかったし、桜紅葉を見られる訳でもなかった。やがて俊之は家元の娘の光子と結婚をした。雪乃には一言の相談もなかった。雪乃も何も尋ねなかった。

今日の雪は予想外だった。東京では朝から曇ってはいたが、吹く風はそれほど冷たく強くはなかった。演奏会の事後処理もほとんど済ませ、雪乃は独り列車に乗った。後か

ら俊之が来るはずになっていた。

列車で郊外へ来るとやがて窓の外では糞になり、すぐに雪に変わった。列車を降りて彼女がタクシーへ乗った時には、すでに道は真っ白になっていた。彼女は宿へ着くことが出来たが、後から駅へ到着した俊之は、東京へ帰って行った。

女将は屈託なく雪乃に問う。

「お幾つになられますの」

「あの人が小学生の時に、私は高校を卒業して、内弟子に入りました。あれから長い月日が流れました」

俊之は数年前に初めて創作を手掛けた。それが思いのほかよく出来ていて、邦楽誌でも新聞でも大きく取り上げられた。金沢の父も納得した作品であり、家元が実力を認めて、光子との縁談が進んだのである。それから彼は自信をつけたらしく、何作品も創作曲を手掛けた。

今度、俊之が手掛けた津田流百周年記念創作曲『四季の宿』は徐々に何枚もの譜面になっていった。幹部連中の連弾によってさらに調整が行われ、それに鳴物の師匠達も協力して出来上がったのは、俊之が手掛け始めてから二年以上かかっていた。全体で四つの段からなり、置唄、出端が『桜の段』。口説きになって『螢の段』。ここは艶やかなスローテンポとなり、唄方の開かせどころである。やがて曲はテ

ンポの速い華やかな踊地となって『紅葉の段』へ進む。三

味線と鳴物連中の掛け合いが聞きものであり、見ものである。特に立味線と上拍子の掛け合いは、この曲の最高潮の所である。チラシに入ると『雪の段』になり、下座囃子も加わって華やかさの中に凄味が加わる。曲は、去っていく男を吹雪の中を追いかけ続ける女の、執念が燃え盛るクライマックスである。踊りでは、鐘の中に隠れた男を蛇になってまでも川を渡り、鐘をぐるぐる巻いて見得を切る、あの『京鹿子娘道成寺』という華やかな出し物がある。それと似ているが、『四季の宿』では、最後に祠に隠れていた男が出て来て、女とはハッピーエンドで終わるように仕組まれている。過去の道行物では必ず男と女は死ぬ。だが俊之の今度作った創作曲では、男と女は死なない。死出の旅に出る男女ではなく、新しい明日の為に生きる強い二人となっている。最後の部分は、幹部連中と創る時に散々揉めた所である。男女が生き残る道行物など今まで聞いたことがない、という長老達の意見を俊之はとうとう押し切った。

道行物は、そのほとんどが雪の中の逃避行が多い。汗をかきながら逃げたり、螢を眺めながら入水する心中物は聞いたことがない。俊之の創作した終曲近くでは、名曲『鶯娘』の出のように降りしきる雪の中で、飛び込むつもりを川を見下ろしてしょんぼり佇んでいる。そこへ男が現れ、曲は明るい賑やかな三下がりになる。曲は本調子に戻り出

端と同じように三味線、鳴物での幕となる。

弦

96号

「私はね、宿の若女将修行が嫌で、ある日泊り客と駆け落ちしたんですよ。お芝居のように、二人して心中するつもりではありませんでしたけどね」

コロコロと口元を押さえて笑う女将の様子に、思わず雪乃の頬にも笑いが浮かぶ。

「ところが、お決まりのコースですよ。やがて男に捨てられましてね。住む所もお金も無くなって帰って来たもの、どうしても家へ入る勇気がなくて、夜中に納屋で寝ていたんです。それを母親が見つけてましたね」

「偶然ですか」

「ああいうのを、母親の勘っていいのですかねえ。納屋の戸が開いた時は、本当にびっくり致しました。翌日から、なあーんにもなかったように、また日常が始まりました」

「大女将の勝ちでしたね」

俊之は今頃どうしているだろうか。光子と幼い長男とで、会の成功をしみじみ味わっているのだろうか。それとも今夜も家元と呼びつけられて、色々と細かい部分のダメ出しを受けているのだろうか。

この宿に二人で来たこと。あれはアクシデントに過ぎなかった。あれきり二度と会わなければ、何事もなく過ぎて行ったのだ。それまで弟のように思っていた。しかし決し

て、同等もしくは年下のやんちゃ坊主だとは考えていなかった。あくまで支部長の二男として、自分はこの内弟子としての、二人の関係だと思っていた。東京へ俊之が出て行ってもそう思っていた。彼を男としてみていることなど一度もなかった。俊之の方も雪乃のことを、女性としてみていなかったと思う。だからこそ彼が東京へ起居を移しても、その上下関係は絶対で、揺らぐことなく続いていたのである。一年生の頬つべたの真っ赤な少年時代からの、付き合いだったのだ。家元の稽古場での二人の稽古も、その続きだったのだ。

それが、突然……だった。

俊之が雪乃の列車に乗り込んで来た時は、単純に昼間の諍いの続きに来たと思った。

山桜の花びらの散り込む部屋で初めて肌を重ねた時、雪乃は将来のことなど考えていなかった。俊之もそうだったろう。若い男の感情が一時的に爆発しただけのことだったのだ。それぞれが、あの時の自分の行動を否定出来た。だが……違った。

二人とも再び同じ思いを持った。逢瀬を重ねる度に後悔をしていた。どうにもなるものではない。分かっているが二人は逢い続けた。男と女の心の熾火は、どうにもならない冷たい光りを放つ。

「あなた様も、自分のことを考える年になりましたね」  
 女将は料理の器を手早く片付けながら言う。

「男と女……その行く末は、おのずと違ってまいりますわ」  
 何となく真顔になった女将が、しみじみとそう言った。

雪乃もそう思った。

「もう夜も更けました。お夜具を整えさせて頂きますね」  
 女将は襖の向こうへ一組だけの夜具を敷き終えると、就

寝の挨拶をして部屋を静かに出て行った。  
 布団の足元にはアンカが入っていた。そのほっこりした

温もりと、日本酒で身体が温まっているのとで、却って雪  
 乃は眠れなかった。

昨夜、家元が珍しく私室へ雪乃を呼んだ。

「どうかね、金沢の方は……」

支部長交代の話が浮上しているらしい。俊之の兄である  
 長男が、引き継ぐことになるのだろうか。そうなれば大き  
 な波は立たないだろう。しかし、そうなると、ますます俊  
 之が金沢へ帰る理由がなくなる。今は稽古場の二階に支部  
 長が寝起きしていて、長男は稽古日に通って来ている。だ  
 が長男が支部長となれば、住居はおのずと反対になる。長  
 男一家と同じ屋根の下で雪乃は、当然住み辛くなるだろう。  
 今までの雪乃の仕事も、その大半は長男の妻が行うように  
 なるだろう。

「私もそろそろ家元の座を、譲ろうと思っっているのだが

か。それとも俊之の前から姿を消すように、と暗に言っ  
 ているのか。雪乃には分からなかった。

雪乃は布団を抜け出して、素足のまま雪見障子を開けた。  
 廊下の向こうにはガラス戸があり、雨戸は締められていな  
 い。部屋の中の淡い光の向こうで、雪はまだ何時止むとも  
 なく、降り続いていた。

(「弦」96号より転載)



市川しのぶ

いちかわ しのぶ

- 1943 名古屋市に生まれる
- 97 名古屋タイムズ社芸大賞受賞
- 2000『桜のレクイエム』出版
- 02『梧桐の詩』出版
- 04『横町花見小路』出版
- 05 日本文学館大賞審査員特別賞受賞
- 06 中部ペンクラブ文学賞特別賞受賞
- 『風のメロディ』出版
- 中部ペンクラブ会員
- 「弦」同人

雪解霽

神通明美

銀華文学賞奨励賞受賞

人は法の裁きによって冷厳にのみ処理されるものな  
 のか。法廷の場で裁断される人間が、苦悶し、叫び  
 をあげる。その生身の声がここにある。裁かれる人  
 間——その姿に肉迫し、叫びと真の思いを描く法廷  
 文学。法と人間の狭間を鋭く突く新鋭小説集

御注文はアジア文化社まで

弦 第96号

……

長唄三味線の大きな流派の、本部も金沢支部も若返るこ  
 とになる。雪乃はその次期家元の名を尋ねることが出来な  
 かった。俊之が継ぐ。そうに違いない。金沢支部長が長男  
 で、東京の家元が次男ということになる。そうなると……。  
 大波が立つだろう。幹部連中は承諾しまい。兄と弟の間で  
 も色々問題はあつた。流儀全体が揺れる。

「お前には、今更こんな話をするのもおかしいが……」

家元は大きく一つ溜息をすると、間を開けてゆっくり切  
 り出した。雪乃は小さな身体をさらに小さくして、固まっ  
 ていた。どう切り出されても仕方のないことをしている。

「実は、徳島支部長の連れ合いが亡くなって、もう一年以  
 上になるんだが……」

金沢と同じように徳島にも支部はある。だがその規模は  
 ごく小さい。

「それでな、お前をぜひにと……。まあ、男だ女だとい  
 う年でもないだろうが」

雪乃は顔をあげることが出来なかった。

「お前も知っての通り、こういう世界というものは、内か  
 ら支えるしつかりした者がおらんと。まあ、考えておい  
 て……」

家元はそれ以上言葉を発しなかった。ずっと独り身を通  
 している彼女のためを思って、話を進めようとしているの

# 弦

愛知県

## 五十年の節目

「弦」創刊号を世に出したのは一九六五年だから、今年二〇一五年は記念すべき五十年の節目に当たる。

同人雑誌のほとんどは三号雑誌までで終わるとの世評を覆す気概で始めたものが、続けてこられたのは意地と好運が重なったからだろう。踏まれても遅しく生き残るだけが取柄の雑草のような若さがあった。

当時の名古屋周辺には、「作家」とか「東海文学」「北斗」という名だたる同人雑誌が存在していたが、若い「弦」であるうとも、同様に同人雑誌の一つだと、すこしも臆するところはなかった。自分らを書きたいものを力任せに書くことで満足していた。しかし、ご多分に洩れず離反があったり他の同人雑誌「未開地」や「無名」との合流があったりした。その苦難の時期を乗り越える毎に、新しい活力を吸収し、共に歩むことになった。そして文学をするという純な気持ちが、しだいに研ぎ澄まされてきたと思う。

弦の会でたいせつにしてきたことは、自分の作品を発表する場だけで良しとするのではなく、他の同人の作品に対



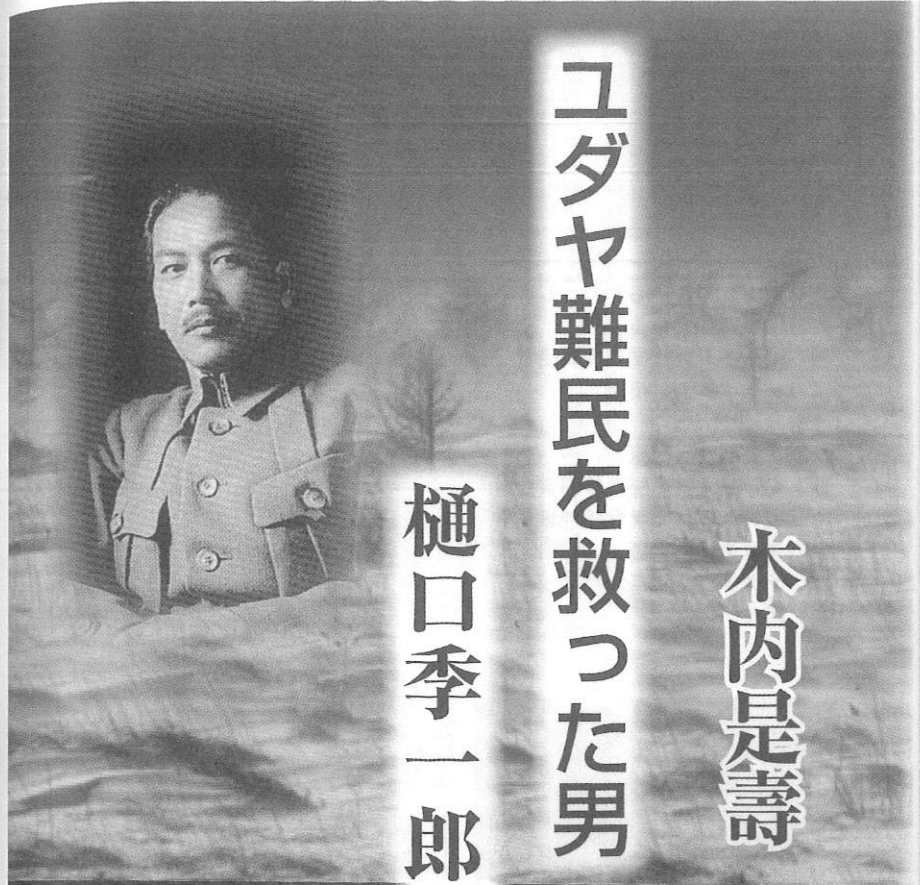
合評会は同人外の人加わる

しても、よい読者となり、個々の作者の推移を親身になって読み込み適切な批評を加えることだった。この連続性が同人の結束を強め、信頼感を増すことにも繋がった。  
もう一つたいせつなことは月一回の例会を欠かすことなく続けてきたことだろう。雑誌の発行は年二回で合評会は四回、残りの八カ月を読書会に充ててきた。読書会のテーマは古今の名作を取り上げてきたのは無論だが、その時代を反映し、話題性のある作品も適宜に読んできた。最近では現代の海外文学の翻訳ものに目が向いている。  
例えば、アジアの作家、ラットアウト・ラブチャルンサップは、タイ人の母とアメリカ兵との混血青年の眼で、タイの内情を鋭く描き出していたし、インド・イギリス・アメリカの

# ユダヤ難民を救った男

## 木内是壽

### 樋口季一郎・伝



ナチスの弾圧にシベリア経由で満州に逃れてきた2万人のユダヤ難民を、命を賭けて救った日本人将軍がいた。ハルピン特務機関長樋口季一郎少将。厳寒の中で死に瀕したユダヤ難民を人間として救済した英傑の軌跡を辿る歴史評伝。

アジア文化社

三国に関わるジュンパ・ラヒリの作品は、インド・パキスタン戦争での民の声が伝わり、悲惨な中にも人間性豊かなものが感じられる小説であった。

このような読書や批評精神を持つことによって、同人雑誌が陥りがちな、身近な肉親のことや自身の身辺雑記を綴る題材を越えて、創造力を掻き立てられる内容や、社会的にも不条理なことを凝視する視点も生まれてきた。我々が書かねばと思う素材やテーマを見つめる努力をすることもたいせつなことだ。

そんな中で、小説の技法に話が及ぶのは言うまでもないことだ。文章表現が稚拙では折角の作品の力も半減する。文体の確立は個々の文章力の修練にほかならない。虚構の世界を真実だと思わせるほどに緻密な描写力があってこそ、読むに耐えうるものになる。要は人の心を打つものを書くことが結論であろう。

随分に偉そうに、批評家めいたことを述べていても、所詮は同人雑誌に籍を置く一人ひとりの書き手にすぎないことも確かなことだ。

一九八六年、名古屋に同人雑誌の集合体である中部ペンクラブが結成された。個々の同人雑誌が交流し合い、活動することで繋がりを継続させようという試みであった。弦からも数人の同人が、創立会員に名を連ねた。



「弦」合評会のあとで

この中部ペンクラブも二〇一五年には、創立三十周年を迎えることとなった。中部ペンクラブは個人の資格で参加する会だが、その個人が所属している同人雑誌の数は、五十誌を越え、地域も愛知・三重・岐阜県と広範囲に及んでいる。

中部ペンクラブが主催する活動は、文学賞の公募と選考。会誌『中部ペン』および機関紙の発行。公開で開催する文学講演会・シンポジウム・文芸セミナー・文学散歩・交流合評会など多岐にわたっている。この活動を通してどのよ

うな効果があったか、との判断を述べるのは、おこがましいことだが、同人雑誌としてだけでなく、一地方に於ける文学の潮流の一つが、ここにあるとは言える。

雑草を自認する存在でも、自分たちの文学活動を支えているのだという実感がある。中部ペンクラブの活動を支えているのは、無償の営為を続ける同人雑誌の人たちだ。それを宿命と自ら納得していても、脈々と受け継がれて行くものが、ここには存在している。

「中部ペンクラブ」と「弦」との重なりは三十年であり、この間の文学的交流は、「弦」のみならず、各誌の文学に関わってきた者、共通の歩みとも重なるはずである。文学作品は個人の内面的なつくりものだが、如何に高められ結晶として認められるかは、やはり切磋琢磨する謙虚な姿勢と行動の中から生み出されるものであろう。

(弦の会代表／中村賢三)



木戸順子氏の中部ペンクラブ賞受賞時に、市川しのぶ氏（左）といっしょに

弦の会 事務局

〒四六三・〇〇一三

名古屋市守山区小幡中三丁目・四・二七

中村方 ☎ 052・794・3430

## インナーマザー

木戸順子

1

自室のベッドの端に腰を下ろして、八十五歳になったばかりの母の雪子は白い布をもてあそんでいる。部屋はいつも通りの乱雑さだ。色紙や、新聞に挟まってくる広告の紙を蝶の形に切り取って、床に並べたり壁に貼ったりするのがお気に入りである。娘が昔使っていた図鑑を見せた時から、病に取りつかれたようになってしまった。何故か他の虫や動物には見向きもしない。退屈しのぎにと、子供におもちゃを与えるような感覚でそれを手渡したのだが。図鑑の中の蝶は、既にことごとく切り取られてしまっている。母の部屋とリビングの間には木製のドアがあって、それ

あの白い布は何だろうと目を凝らした。時折それを頭の上に乗せたり、広げて顔を拭いたりするような仕草をしている。危険な状況にはならないだろうと判断して、昼食の支度に取り掛かった。夕方には隣県で働いている一人娘の多香子が帰ってくる。休みはあっても毎週は来ない。母と二人だけの生活は時に息苦しく、疲れる。本心はしばしば帰ってきてほしいのだが、彼女には自分の仕事や生活があるのだ。邪魔はしたくない。しばらくして覗くと、母はベッドに横になっていた。胸の上に白い布を置いて、どうやら眠っているらしい。

うどんを鉢で細かくぶつぶつに切って、濃いだし汁で煮た。薄い醤油味で仕上げ、片栗粉でとろみをつけて玉子でとじる。少し冷めてから、母を起こそう。りんごのゼリーは市販のものである。夕べの残り物のかぼちゃの煮物を冷蔵庫から取り出す。母のために黄色い部分だけをスプーンで掬って潰し、ミルクを少し加えてスープにした。最近をよくむせるようになった。インターネットで、嚥下障害を未然に防ぐための調理法を時々調べている。まだ自分の足で歩けるし、食欲もある。入浴時だけはそばについて、洗髪や背中洗いの手伝いをする。

母はまず、りんごゼリーをおいしそうに食べ始めた。お母さん、それはデザートよと、以前は注意していたが今は言わない。とにかく食べてくれさえすればいい。

が唯一の出入り口である。リビングで居ながらにして母の様子がわかるように、同居が決まった時に壁の一部を取り壊して窓を付けた。同時に将来のことを考えて、一階部分をバリアフリーにした。ここから、一日にどれくらいの時間母を眺めているだろう。一人娘の私は、母の世話をしないわけにはいかないと何時も自分に言い聞かせている。父は既に亡い。

白い壁にたくさん蝶が止まっている。向きも色も大きさもまちまちだが、何となく美しい。切り紙に集中している時、母は機嫌がいい。もちろん長続きはしない。三十分が限度だった。その仕事を終えて、母はついさつきベッドに腰を掛けたに違いない。

「おいしいわ、めぐちゃん。初めて食べる物ね、これ」かぼちゃを口に運ぼうとしていた私の手が、止まった。娘の私をめぐちゃんと言った。いつもは呼び捨てで、めぐみ。それにこのゼリーは喉越しがいいので、一週間に三度は出している。忘れていたのだ。母の顔をまじまじと見た。別にいつもと変わりはないように見える。「雪子」の名前のおり、母は色が白い。皺もシミも年の割には少ない方だ。小柄だが、痩せこけてもいない。若い頃は美しかったと父が言っていたことを、思い出した。今でもきれいなおばあさんの部類に入るだろう。白髪をさっぱりと短く切っている。

ついさつき、すごい剣幕で私を叱り飛ばしたことなど全く記憶にないのだろうか。こちらの方がまだその胸のざわめきをなだめ切れてはいないのに。

母を起こしに行き胸の上に置かれた白い布を見た時、息が止まりそうだった。それは着古した男物の木綿のパンツだった。ゴム通しの辺りの布地には、擦り切れた部分何か所かある。ゴムはすっかり伸びきっているが、古い物とは思われない白さだった。胸の動悸を悟られないように、静かに聞いた。お母さん、これ、なあに。摘んで母の目の前に差し出した。瞬間、母は私からパツとパンツを取り上げた。何をするの。これは私の大事な物だよ。大声で言ううと、血相を変えて私を睨みつけた。見たことがないよう

な怖い顔である。こんなことは初めてだった。大丈夫、取ったりしないから。教えてほしいだけよ。それはなあに。この言葉に少し安心したらしい。これはね、お父さんの下着だよ。見ればわかりそうなものだ。引越してくる時に持ってきた。きれいに漂白してね。几帳面で、いかにもきれいな母のやりそうなことだった。

部屋の隅に置かれた母の箆筒にいつも洗濯物をしまっているが、今まで全然気付かなかった。父の死後、しばらく一人で暮らしていた母が八十二歳になった時、ここに引き取ったのだ。私は五十七歳だった。もう三年目になる。丁度その年、多香子は福祉大学を卒業して、隣県で働くことになった。夫の伸彦には海外勤務の辞令が出ていた。それは予期しないことだった。最後のご奉公になるだろうと言って、単身でタイの自動車工場へ赴任していった。

夫と娘がほとんど同時にいなくなることがわかって、私よりも二人の方が慌てた。おばあちゃんに来てもらったらどうかと娘が言うと、夫はすぐに賛成した。一人きりで生活するのは心配だという気持ちは嬉しかったが、私は多香子のことが気がかりだった。夫の単身赴任は初めてではなく、向こうには日本人のスタッフが何人もいる。それよりも、母と二人だけの生活を想像することがなかなかできない。それほど年月が経っていた。

大学生活を東京で済ませ、そのまま就職し、都内で結婚

て少しはゆとりが出来たのか、一か月に一度は来るようになった。向こうで好きなテニスも始めたと言っている。来るたびに母の状態が少しずつ変化していくのがわかるのだろう。専門的な勉強をして、その上いつも年寄りの世話をしていたら、私とは違う見方をしているのかもしれない。

久しぶりに三人で夕飯を食べ始めた。多香子が何くれと世話をしてくれるので、気が楽である。テレビでホームドラマをやっている。思春期の女の子が母親に反抗的な態度をしている場面、母は画面を食い入るように見つめた。

「多香子ちゃん、あんたのお母さんはね、あんなこと、一度も私に言ったことはなかった。それは聞き分けのいい子でねえ」

「えっ、そうなの。知らなかったわ。おばあちゃん、ご飯食べるの、上手ねえ」

きざみ食や流動食を見て息を呑んだことなどおくびにも出さずに、相手をしてきている。先回来たときは、まだ普通食だったのだ。画面は田舎の風景に切り替わった。

「めぐみ、見てごらん。ほら、家の周りとそっくりの所だ。あんな一本道を、めぐみも自転車まで毎日通ったんだよ。私はいつも、姿が見えなくなるまで表に立っていた。角を曲がる場所に赤いグラジオラスが何本か咲いていて、きれいだったねえ」

生活を始めた。私は夫の姓を選択した。多香子が高校二年の時、伸彦の何度目かの転勤で、二人の生まれ故郷であるこの県の大きな町に移ってきた。慌ただしく事が進んで、しばらく四人で生活した後、二人はそれぞれの地に出発した。おばあちゃんに来てもらったらと言ったのは私だけ。娘はそこで口をつぐんだ。しばらく会わないうちに、年とったね。ママ、体に気を付けてね。困ったことがあったら、電話をしてね。余り丈夫ではない母親を氣遣って、多香子は玄関先でそう言った。父が亡くなってから、母の老化がこれほど進んでいるとは誰も想像していなかった。頻繁に会っていない分、その思いは強かった。母の老後を見るために同居するような形になった。

高齢者の増加に伴って、福祉施設の需要は高まるばかりだったが、人手不足という状況でもあった。家から通える職場を選ぶことも十分出来たが、多香子はそうしなかった。今の老人施設には尊敬する一年先輩が既に就職していて、一緒に働きたいと強く希望した。その彼女は、学生時代によく家にも遊びに来ていた。信頼できる人柄だとわかっていたし、伸の良い様子を見ているので、伸彦も私も賛成したのだった。娘には自分の思い通りの人生を歩んでほしい。間違っても母親の自分がその障害になることだけは避けたという思いだった。

初めの一年は数えるほどしか帰らなかった。二年が経つ

昼間とは別人のように頭脳明晰である。私はあつけにとられていた。確かに母の言う通りだった。J Rの駅に近いというだけの小さな町。中学校に勤める父より一足早く自転車で出発し、私は電車で三年間高校へ通った。いつも背後に母の愛情を強く感じながら、自転車を漕いだ。背中に張り付いていた母の大きな二つの目。グラジオラスの角を曲がった途端、少し気分が軽くなったような気がしたのだった。緑の中に咲くグラジオラスは美しいというより、私にとっては角を曲がる目印だった。自転車の前かごの中で、母の手作りの弁当がカタカタと鳴る。健康が一番だからね。しっかり食べて、しっかり勉強しておいで。手渡される弁当は、クラスの誰の物より美しく、栄養たっぷりだった。めぐみのためにいつもおいしい物を作っているんだから。父にも同じような弁当を作っている筈なのに、いつも母はそう言った。

多香子が母を風呂に入れてくれた。その間に母の部屋に散乱している紙くずを片付ける。気になって箆筒を開けてみると、一番下の引き出しの奥の方にビニール袋が押し込んであった。中からパンツが一枚、シャツが二枚、靴下が二足出てきた。どれも古い。手前にブラウスが入れてあるが、さらにその奥まで点検したことがなかった。父の物を二セットずつ持ってきたのだ。位牌は本家に預けてきた筈だから、これを父だと思っ

無くなったと言つて騒ぎになるのも嫌なので、元通りに仕舞つておいた。

入眠剤のお蔭で、母は何時も眠りにつくのが早い。

「今日は多香子がいるせいとか、張り切つてよくしゃべつたわね、お母さん」

「コーヒーを淹れながら話しかけた。」

「お年寄りつて、誰かが来ると別人のようにしつかりする人が多いよ。施設でも友達とかが面会に来るでしょ。そうすると、私達、びっくりしちゃう。しゃべり方や歩き方まで変わる人がいるんだから」

「仕事は順調なのね」

「うん、大分慣れたけど。でも、現実には学校で学んだ通りにはいかないものどつくづく思う。何と言つても、性格も症状も一人ひとり全部違うもんね。年は同じでも」

多香子はそれ以上は言わなかったが、私にはよくわかった。彼女はまだ若いからいいようなものの、母一人を看ているだけでも大変なのだ。

「まあ、でも自分で選んだ仕事だからね、お給料は安いけど。それよりおばあちゃん、最近変なことを言つたりするでしょう」

風呂へ入れた時、雪子は多香子にめぐちゃんと呼びかけたという。それも二度。彼女は取り立てて訂正はしなかったらしい。背中を流していたら、おっぱいも洗つてちょう

だいと甘えた声で言つたというのだ。

「おばあちゃんの胸なんて、あらためて見たこともなかったでしょう。けっこうポリウムがあるんだね。白くて、私、ちよつとびっくりしちゃつた。しょうがないから軽くタオルで洗つてあげた。そしたら、何と言つたと思う？ ああ、気持ちいいと言つて、本当に気持ちよさそうな顔をしてね、もつと触つてと言つたのよ」

「実は、お正月、パパが帰つて来ていたでしょう。タイへ戻つてから、お母さん、時々様子がおかしくなったの。単なる勘違いかなと初めは思つただけだ。年が年だからしかたないかもしれないわね」

「パパが帰つてから、そろそろ半年経つね」

父のパンツの話をした方がいいだろうか。

「人によつて急速に惚けが進むこともあるけど、私の感じでは、おばあちゃんはまだ認知症予備軍というところかな。よく食べるし、徘徊もない」

私は母の白い胸を思った。皺こそできて垂れてはいるが、若い頃は娘の私から見ても嫉妬を感じるような美しさだった。外見は母に似ることのなかった自分に対して、いくらかの安堵と寂しさの入り混じつた複雑な気分だった。

「ところで、ママ。おばあちゃんがママのことをめぐちゃんと呼ぶのは、もしかしたら子供の時のママを思い出して、懐かしがつてるんじゃないのかな。多分、おばあちゃんに

とつては、ママが一番大切な存在だったんだと思う」

自分の母親に対する複雑な気持ちも、多香子に話したことは一度もない。その娘の指摘に内心たじろいだ。確かに幼い時はそう呼ばれていた。小学校入学を機に、母は呼び方を変えたのだった。

## 2

母はそわそわし始めた。以前のようには自由に歩き回ることができなくなって、すぐにイライラする。

「めぐみ」

ベッドに腰掛けたまま、さつきから大声で呼んでいる。もう三回目だった。二時十分前である。

「めぐみ、部屋の掃除は済んだのかい」

母に近付いて、大きく頷く。耳も少し遠くなってきている。微かにバラの香りがした。自分ではもうできないのに、人が来るという日には部屋をきちんとしておきたい。この考えは昔のままだった。

「これでいいかねえ。似合うかねえ」

しきりに気にしている。パジャマの上に羽織っているお気に入りの薄紫のレースのカーディガンは、さつき私を選んで着せたものだった。リハビリをしてくれる理学療法士の竹宮は、何時も丁度二時にやつて来る。大柄で清潔な感

じのする三十歳くらいの男性を、母は心待ちにしている。

髪を梳かし、うっすらと口紅を差す。今朝はローズオイルを腕や足に擦り込んだ。それは多香子が病院へ見舞いに来た時、持ってきた物だった。おばあちゃんはお洒落だから、病院でもきれいにしたいでしょ。これはとても肌にいいのよ。母は大喜びだった。

竹宮がやつて来ると、私は母の部屋を出る。一回目は付き添っていたのだが、母はすぐに私を追い出すようになった。窓から時々二人の様子を眺める。

六月の初め、多香子に言われて病院の物忘れ外来に連れて行く予定をしていたのに、その矢先、母は大腿骨を骨折した。紙の蝶を壁に貼ろうとしても、手の届く範囲にはもうあまり隙間がなくなっていた。母はベッドに立ち上がつて、何匹かをセロテープで留めようとしていたのだろう。

私は外へ洗濯物を干しに出ていた。母の悲鳴を聞いて駆けつけると、床に倒れていた。ベッドから下りようとして立ちくらみでもしたのか、足を踏み外したのか。子供のよう泣いている。痛がつて動かすこともできなかった。

救急車で病院へ運ばれて、手術をした。リハビリを済ませて三か月後に退院したが、年齢的なこともあり、なかなか完治しなかった。介護保険の適用を受け、デイサービスを週二回、訪問リハビリを週二回と決めて二週間が経つたところだった。



伸彦がお盆の休暇で帰国したが、母の入院で落ち着かなかった。大丈夫か。退院した後在宅介護が無理だったら、どこか施設に入ってもらおうという選択肢もある。お前が倒れたら元も子もない。自分の健康が一番大事だよ。一度多香子とよく相談してみるといい。帰る前に伸彦は心配そうに言った。夫の言い分も尤もだった。それを心のどこかで望んでいる自分を否定することはできない。しかし、母が自分に注いでくれた愛情を思うと、簡単に結論は出せなかった。足さえ元通りになればと、祈る思いの毎日だった。母の笑い声が聞こえる。何の話をしているのだろう。竹宮は、仰向けに寝ている母の足を片方ずつ上げたり下ろしたりしている。上げた足を膝で曲げて上半身に近付けようとしているが、痛めた右足は一向にうまくいかない。その後、両方の腕にもマッサージを入念に施す。

やがて母は、両手で歩行器のハンドルを握りしめ、体を預けるようにして歩く練習を始めた。やつとりビンゴまで来ることができた。

「この前より歩くのがうまくなりましたね」  
褒められて母はうれしそうだった。

「もう少ししたら、松葉杖で練習しますよ。次は杖。最後は何も使わずに歩けるようになりますよ」

一体どれくらい時間がかるのだろう。果たして自分の力だけで歩けるようになるまでに脚力が回復するのだから

めぐちゃんと呼ばれると、反射的に体も心も緊張するようになってしまった。受け答えにも神経を使う。

「何かちょっと用があるみたいだったわよ」

マンゴープリン容器にびたりと張り付いているビンニル製の蓋を剥がしながら、さり気なく言う。竹宮を父と間違えているのかもしれない。

「ふーん、お前、さつき、お父さんに何か言われていたんだろう」

多香子から教えられている「接し方四か条」を順番に思い出す。正面から見つめる。こちらから話しかける。寝たきりにしない。やさしく触れる。これが認知症の予防には効果があるらしい。

「別に何も言われてはいないわよ」

母の目をまっすぐに見て、穏やかに言う。

「おかあさん、マンゴープリンの味はどう？ おいしかったらまた買ってくるわね」

まずは自分から話しかける。寝たきりにしないためには、こうして度々リビンクへ誘った方がいいだろう。時には、外へ散歩に連れ出すことも考えなければならぬ。

「お茶がおいしいねえ。もう一杯おくれ」

はいと返事をしながら母の方へ回って、肩をやさしく撫でる。いつまでこういう生活が続くのか、誰にも予測は出来なかった。心と行動は裏腹である。

うか。デイサービスの施設ではどこでもなかなか人手が足りなくて、付ききりのリハビリはなかなか難しいでしょう。家でも少しずつ歩行器を使って歩く練習をしてください。随分違いますから。竹宮の言葉が耳から離れない。

前から気になっていた、まだら惚けの方が心配だった。骨折して入院すると、急に痴呆が進むということをよく聞く。しかし、母の状態は以前と余り変わらないように見える。多香子はそのことを十分承知していて、お盆に来た時、その予防法のいくつかを私に伝授していった。意識的に実行したことはまだ一度もない。まずは自分に来ることから始めてみた方がいいかもしれない。

竹宮が帰ると、母はしばらく昼寝をした。四十五分ほどのリハビリでも疲れるのだろう。やがて目を覚ました母が、ベッドから立ち上がろうとしている姿を時々横目で見ながらお茶の用意をした。水出し煎茶とマンゴープリン。九月も半ばをとうに過ぎたというのに、まだ暑かった。

母は両手でベッドの端を掴み、ゆっくりと立ち上がった。歩行器の中へ体を滑り込ませるように入れる。はらはらするが、敢えて手伝わない。リビンクに来ると、やはり何とか自分で椅子に移った。

「めぐちゃん、お父さんはどこへ行ったのかい。さつきまでいたのに。私がきれいに磨いておいた靴を履いて行っただろうね」

その夜は、なかなか寝付かれなかった。電話をしている母の声が、いくら振り払っても私の心を占拠し始める。そうすると心が落ち着かず、目が冴えてしまうのだ。瑞子、久しぶりだね。元気かい。私はベッドから落ちて骨折したんだよ。ここまではよかったが、実は、先方は既に知っていることだった。おやつを食べた後、電話を掛けたいというので、部屋の隅の電話の前に椅子を移動させて座らせた。

母は三人姉妹の一番上で、父は婿養子だった。二人の妹は他県に嫁いでいて、ここへ来るまでは時折会っていたようだった。すぐ下の瑞子とはこれまでもよく電話をしていたことは知っている。骨折してしばらくしてから、その旨を二人に知らせた。一番下の妹の運転で二人は翌日見舞いに来た。水くさいわね、めぐみさん。すぐに知らせてくれないなんて。二人は口を揃えて非難したが、帰り際にはよろしく頼むの一点張りだった。不自由な姉を見て、かわいそうになったのだろう。最期まで家で面倒を見てやってね。あなたは一人娘なんだから。お願いします。揃って頭を下げた。

リビンクに続く台所で、夕飯の支度を始めた私の耳に母の声がよく聞こえてくる。ところで困ったことが起きてね。めぐちゃんがどうしても東京の大学へ行くというのさ。ここにだって電車を通えるいい大学があつてね、そこへ入るために勉強してたのに、どういふことだと思う？ 栄養

たつぷりのお弁当を作って、家の手伝いはさせないようにして、その上遠い塾に二つも通わせたのにすべったんだよ。東京の大学は私立で、私は大反対なんだけど、どう思う？ あんなにめぐちゃんのためを思って努力した私は、馬鹿みたい。お父さんが、まあ、浪人するよりはいいんじゃないかと言うので、泣くにも泣けないんだよ。別れて暮らすなんていやだよ。

事實は母の言う通りである。しかし、何を今更そんな昔のことを言い出すのかと思って、ハッとした。母がただ一方的に話し続けているだけで、相手が反応しているという感じが全くない。母に近付いて思わず受話器を取り上げた。こういう突然の乱暴な行動が一番いけないとわかってはいたが、自分を抑制することができなかった。ツーという無機質な音がいつまでも続けばかりである。一体どうしようと言うんだね。この子は。母は両手で私の腰の辺りをぶつた。そんなに強い力が残っているとは信じられなかった。しばらく打たれ続けられながら、痛みよりも哀しさが押し寄せてきた。相手のいない電話なのに、受話器を握りしめて母は話していたのだ。止めなければいつまで話し続ける積りだったのだろう。

私は地元の大学の入試を故意にすべったと言ってもよい。わかつている答えの多くを空欄にした。すべり止めに受けた東京の大学に行くために。母から離れるために。そのころね」

しばらくすると母が帰ってきた。車椅子のまま降りてくる。施設の男性職員が母を軽々と抱きかかえ、玄関を入れて歩行器に掴まらせる。母は機嫌よく車を見送った。私は深々と頭を下げる。この瞬間、私にとっての安息日は終了した。

「おばあちゃん、元気そうね。今日は何をしてきたの」

リビングの椅子に戻った母に、多香子が話しかける。

「午前中は車椅子に座ったまま体操。みんなでテレビを見ながらお昼ご飯を食べたよ。ご飯はめぐみの作る物の方がおいしいね。お風呂に入れてもらって、おやつを食べて、歌を歌っておしまい」

「あら、楽しそうね」

「まあまあね。ところで多香子ちゃん。あなたは福祉の勉強をしたんだろう。毎日年寄りというんだろう。どうかね、この私の海馬はまだまだ正常ですか」

私は思わず二人の顔を交互に眺めた。

「大丈夫、大丈夫。全く心配ないわよ」

母の顔を覗き込むようにして大きな声で言いながら、手は肩に置いている。

「そうかい。本当のことを言ってくれないと困るよ」

「本当よ、おばあちゃん。私はプロですよ」

母は声を立てて笑った。伸彦がいないだけで、何の変わ

とで母が傷つくことはわかってはいたが、それより強い気持ちで私を動かした。

翌日多香子に電話して、次の休みの日に来てもらった。母はデイサービスに行っていて留守だった。四時過ぎには戻ってくる。

「ママ、あまり気にしない方がいいよ」

開口一番、多香子は言った。

「何の脈絡もなく昔のことを話し始めることって、珍しくないんだから。むしろ言わせた方がいいのよ」

心理学では思い出療法と言うらしい。昔の体験を話すことにより、脳の記憶をつかさどる海馬の活動を活発にしてその劣化を緩やかにする効果があるという。

「この頃いくつかの施設や病院で取り入れていたくらいだよ。だから、何を言っても聞いてあげてね。なるべく元気でいてもらわないとね。早晚オムツも使わなきゃいけないだろうし。それを思えば、話を聞いてあげる方がまだいいでしょ」

昔使った道具などがあると、さらに効果的だという。田舎の家から何か持ってくるのもいいかもしれない。長い間ほったらかしにしてある古い家を、久しぶりに思い出した。

「次のデイサービスの日にでも行ってみたらどうかな」

私の心を見透かすように多香子は言った。

「泊まっていけないから、おばあちゃんの顔を見てから帰らない家族の風景だった。骨折して入院した後でもこんな会話ができるのなら、母の海馬もまだまだ元気なのかもしれない。

生家から持ってきたいくつかの古い物のうち、母が一番興味を持ったのは百人一首だった。車で片道二時間。母のいないうちに往復するのは少しきつかった。近くに住む父の遠縁の者に時々空気の入替えをするように頼んではあったが、玄関を開けると、埃と黴の混ざったような臭いが鼻を衝いた。掃除をしている暇はない。何を持って行くかとあちこちを探しながら、タイムスリップしそうな自分を叱咤しなければならなかった。古い木造の、いつ壊れても何の未練もない家の中に、たった一人でいる。意外にも押し寄せてくる郷愁にも似た思いを追い払いながら、探し物を続けた。

母が帰ってくる時間が気になって、結局その親類の家に挨拶に行く暇もなくなってしまった。

デイサービスから戻って、テーブルの上に置かれている古ぼけた箱を見ると、母はすぐに関心を示した。箱の角は擦り切れ、その上面に描かれている十二単を着た女の人の絵もすっかり褪色している。私はウェットティッシュで箱全体の埃を拭きとった。母は自分で蓋を開けて、取り札をテーブルの上に並べ始めた。中身は思っていたほど痛んではない。いいかいと元気よく言って、母は一枚目を読み

始めた。これはいつも母の役目だった。

「はなのいろはうつりにけりなくいたづらに」

小野小町だ。母の一番好きな歌だった。私は札のある場所を見つけたが、黙っていた。

「わがみよにふるゝながめせしまに」

下の句を二回繰り返した。年を取っても声の調子や抑揚は昔のままのような気がする。正月、友達が遊びに来て賑やかに過ごした小学生の頃の一日が、古い写真のようにくつきりとまぶたに浮かんだ。

「どうしたの、めぐみ。上の句を読んでいるうちに取らなきや駄目だろう」

「はい」

母の言葉が終わるのを待って、大きな返事と共に札を取った。母は楽しそうに次から次へと読み、私は取る。札を取るスピードはだんだん速くなる。子供時代にしっかりと記憶したことは、長い時間がたっても忘れずに覚えているものなのだと感心してしまう。少しずつ楽しくなってきた。

「むらさめの」

私の得意札である。もう札は手中にあった。

「ああ、めぐみ、速かったねえ。お前の十八番だったねえ」

「きりたちのぼるあきのゆうぐれ、でしょ」

思わずそう言い終わった途端、ぞくつとした。母の期待に応えようとしている自分がいたのだ。子供の時と同じ

う片方の手でしきりに撫でていた。

「そうやって読み方を覚えてから、まずお前が読み手になってお父さんとお母さんが取ったね。何度も何度も、お正月でなくても」

いやでもその時の情景が浮かんでくる。そうしてやっとなんか札を取ることができるようになったのは、二年生になってからだだった。

「そうそう、初めの頃は一枚取ったら十円と決めていたよね。五円だったかな。お前はそれのお金をうれしそうに貯金箱に入れていたものさ」

ますます居心地が悪くなってくる。百人一首に限らず、母は何でも私に教え込んだ。庭で育てていた植物の、種まきから始まって育っていく過程。押し花の仕方。肥料の与え方。実がつくものは、その活用方法。本の読み聞かせは勿論だった。そのお蔭で、今の自分があることは認めなければならぬ。もう少し我慢して付き合いなさい、これは治療なんだからと言いつけさせる。それにしても、母の昔の記憶は驚くほどしっかりしていた。

「ほら、よく遊びに来ていた女の子がいただろう。髪の毛を三つ編みにしていた。確か……」

るみちゃんだよと、口まで出かかった言葉を引っ込めた。「るみちゃんとか言ったんじゃないかなあ。外国人みたいな名前がかわいかったねえ。いつも面白いことを言って笑

だった。私の心はざわつき始めた。お利口だねえ。もう覚えてたんだね。む、す、め、ふ、さ、ほ、せ。この七枚は、初めの一字を聞いただけで札を取らないとね。絶対いつか役に立つことがあるからね。遊びだと思って馬鹿にしてはいけないよ。

百人一首を全部空で言えるようになったのは、小学校三年生だった。確かに中学へ行っても高校へ進んでも、古典文学に対する抵抗感全然感じなかった。文法も自然に理解できた。たかが百人一首でさえ、母の魂胆は私の成績向上のためではないかといつから強く感じるようになったのだろうか。親の干渉を疎ましく感じる思春期の頃からだっただろうか。母が重いという感覚は、やはり高校生になつてからだだったかもしれない。楽しい気分は霧消し、私はゲームを終わりにしたかった。しかし、機嫌のよい母の様子を見ると言い出せない。それにこれは治療法の一つなのだった。

「この百人一首はね、お前が一年生のお正月にお父さんが買ってきてくれた物なんだよ。もちろん、私がお願ひしてね。私の上の句を読むだろう。そうするとお前が真似をしてそれを言う。オームみたいなものさ。意味も何も分からず、外国語みたいだったかもしれないね、お前にとってはお練習をしたものだ」

母は遠くを見るような目つきで、手に持っている札をも

わせた」

母の話は、しばらくして終わった。私は一仕事を終えた気分になる。すると、多香子の笑顔が脳裏に浮かび、その笑い声までが聞こえてくるようだった。

## 3

母の探し物に付き合う回数が増えている。置き場所を忘れてしまうのだった。一番多い物は父のパンツ。次は自分の口紅とかスカート。三番目が財布だった。町内で仲良くしている三軒隣の田口さんのお母さんは、今は彼女のお兄さんの家にいるのだが、時々行くと、顔を見るなり財布布がなくなつたと決まったように言うらしい。世間で言う通りなのよ。私が犯人にされるわけ。兄の奥さんは笑っているわよ。今日、私は無実だと言つてね。慣れている人はいいかもしれないけど、ぎくつとするわね、いくら自分の親だといつても。でも、徘徊するよりはいいかもしれないって言い合っているの。大変らしいでしょう、探すのが。どこか遠くまで行っちゃって。

父のパンツは筆筒の引き出しに仕舞われていることが多かったが、トイレのタオルの横に並べて掛けてあることもあった。ベッドの敷き布団の下に隠してあった日もある。全部自分でやったことなのに、いつも大騒ぎになった。

この頃は松葉杖一本で歩けるようになっていて、以前より行動半径が広がった。私の部屋へ入り込んで、戸棚を開けたりする。

「めぐみ、めぐみ。私の口紅をどこへやったの。早く探してよ。竹宮さんが来る時間だよ」

どうやら私の部屋のどこかにあると思っっているらしい。母の箆の上の小さな鏡の横にいつものように置いてあるのに、あちこちを真剣に探している。

昨日は珍しく、デイサービスの担当の佐々木さんから電話があった。さつき、車が出たところですから雪子さんは間もなく到着すると思います。この施設ではそれぞれを名前前で呼ぶ習慣だった。少し言い淀む雰囲気は伝わってくる。一体母は何をしたのだろう。実は最近、デイサービスに来ておられる男の方と仲良くなられてしまっている。それはいいんですが、今日はもう抱きつくやらキスされるやらで。手を握ったりすることは、雪子さんだけでなく他の方にもよく見られることなんです。相手の方は体は健康なんです。視力がほとんどなくて。ご本人は彼に親切にしている積りなんですよ。松葉杖を脇に挟んだまま、片手でその男性の体を回している母の姿を想像した。まあ、一応お知らせだけしておいた方がいいかと思ひまして。返事の言葉に窮して、お礼だけしか言えなかつた。惚けの症状が進むにつれて、母の女の部分だけが突出してきているのでは

次のページからは私の写真ばかりだった。仲良しだったるみちゃんと一緒のものもある。入学式、運動会、学芸会。次に高校三年のクラス写真が目に入って、私は緊張した。母が何も気付かないことを祈った。

「この先生、いい先生だったね。めぐみはきつと志望校に受かると言ってくれた。保護者会の時に」

母は担任の先生の所に人差し指を置いた。それからクラスメイトの顔を一人ずつ指さしていく。

「確かこの子、一度見たことがあるような気がする」

それは私にとって忘れることのできない人だった。人を好きになるとはこういうことなのかと、初めて知った相手だった。既に親からの干渉を拒否したい年頃だったのに、以前の習慣で母は学校でのあれこれについて聞きたがるばかりでなく、口を挟んだ。部活のこと、友達のこと、テスト勉強のこと、お洒落のこと。だから彼と付き合っていたことは、内緒にしていた。

「何という名前だったかねえ。なかなかハンサムな子だったけど」

お母さんのせいで私は彼と別れてしまったんですと、大声で言いたかった。すっかり忘れていらしい。記憶を呼び覚ますことが母の海馬への刺激になるのかもしれないが、返事をする気にはなれなかつた。

あの日は日曜日だった。母が用事で出かけた後、彼か

ないか。父のパンツをもてあそんでいた頃からすでにその兆候があったと思えば、胸に落ちる物があった。

竹宮からリハビリを受ける母をいつもとは違う気持ちで眺める。そう思っで見ると、立ち上がる時も、松葉杖での歩行訓練の時も、必要以上に竹宮の腕や体に触っている。

何よりも、満面の笑みを絶やさないのであった。私の知っている母は、少しづつ違う人間に変身していくように思える。翌日、母が百人一首の次に気に入っている古いアルバムをテーブルの上に広げた。

「これはお父さんだよね。こっちの男の人は誰だったかねえ」

お正月、父の実家へ家族三人でお年始に出かけた時の写真だった。

「これは幸雄おじさんだよ。お父さんのお兄さん」

「そうだった、そうだった。この女の人は奥さんだね。めぐみ、おじさんの家で餅つきをした時のこと、覚えていない。楽しかったねえ、昔は。真っ白いお餅が杵にくっついて、空中に浮かんだようになって、皆がワーツと叫んで。それから、つきたてのお餅を大根おろしにつけて食べたね。めぐみは急いで食べてお餅を喉に詰まらせたことがあっただろう」

そんなことがあったような気がする。

「私はこう見えても、お鏡を丸めるのが上手でねえ」

ら電話があった。出たのは父だった。彼の家は高校を挟んで私の家とは反対方向にあり、やはりJRで通っていた。学校の近くの図書館に来ているんだけど、ちょっと出てこれないかと彼は言った。クラスの友達とグループで出かけることはあったが、二人きりで会うのは初めてだった。状況を察した父は、私を止めなかつた。夕方帰ると、母は既に夕食の支度をしていた。私の外出については何も聞かない。自転車漕ぎながら口実を考えて来たのに、かえって不気味だった。

いつまでも同じ所から指を移動させない母に、仕方なく名前を教えた。母はふーんと言ったきりである。彼は図書館で私を峰さんと言わずに、初めてめぐみさんと名前を呼んでくれた。頭がよくて心の広い人だった。しかし、しばらくすると彼は私を避けるようになった。学校で理由を聞くと、僕達、しばらくは受験勉強に没頭しなければならぬんだからと短く言っ、立ち去った。

すぐに私は父を詰問した。母は私の出先を執拗に父から聞き出し、挙句の果てに彼の名前まで白状させたという。済まなかつた。父は謝った。母には頭が上がりないことはわかつていた。あの子は一人きりの男の子でね。妹が一人いるにはいるんだが、家業を継がなくてはいけない。母さんが担任の先生に聞いてきたらしい。お前を嫁にやるわけにはいかないと考えたんだろう。それで、彼に直接何か

言ったに違ひなかった。そんな先のことまで考えているわけはないのに。

私達の将来の面倒は頼むわね。ずっと一緒に暮らそうね。何かの折には、いつかの科白セリふを聞かされて育った。一人っ子だからと、半分納得しながら聞いていたのだが、あの時ばかりは我慢がならなかった。私は母の思い通りにされる。私の人生は一体どうなるのか。私は生まれて初めて反旗を翻した。

「あの時めぐみは、学芸会で上手に歌を歌ったね。この洋服は私が縫ったんだよ。可愛かった」

全然違うことを言い出した。母の冗舌と比例するように、アルバムは私の心をますます居心地の悪さで満たしていった。東京の大学へ行った時は、確かに母から逃げ出したいと思つた。一緒に生活するようになって二年以上経つても、母に対して素直になれない。別れて暮らしていた期間が長いからというだけではない違和感が、頭をもたげる。何があつたとしても、これほど高齢になつた母を私の方が受け入れるべきなのだ。理屈ではわかつている。伸彦は男だから女同士の微妙な感情を理解してくれないかもしれないが、せめて彼に話を聞いてもらえば多少はストレスが少なくなるかもしれないなかつた。

ある日、母をリハビリに送り出してからぼんやりとテレビを見ていた。若い女性アナウンサーが読者からの手紙を

がときどきしてきた。まるで自分のことを言われているような気がする。同じような人が実際にいるのだ。洗濯機が終了の合図をいつものメロディで教えていたが、テレビの前から離れられなくなつた。

「お母さん、私を抱っこしてくれなかつたでしょ。自分が仕事で忙しくて。だから私の娘も、孫なのに可愛がつてくれないんですよ。私はある日、思い切つて母に言いました。母はきよんとんとして、それから考え込んでいましたね。私の娘とはいい関係になつてほしくて、勇気を出して母を責めました。何回も。そしたらある時、昔のことはごめんねと謝つてくれたんです。私は心が軽くなりました。それから、少しずつですけど……まだ、完全にという状態ではありませんが」

「母親が団塊の世代の場合、今のような悩みを持たれる方が時々いらっしゃいます。勿論、人によって感じ方は違いますが。高度成長期は何とかしていい大学へと思う親御さんが多かったですから。それに職業を持つ母親が多くなつて、忙しくなつたこともあり。母が重く、生きづらい存在と感じて精神的な葛藤が起こる場合、これをインナーマザーと呼んでいます」

初めて聞く言葉だつた。もう一人の女性のように愛情不足が原因で、母を求める気持ちの膨らんだ結果、苦しみが大きくなっていくこともあるのだ。

紹介している。どうやら相談コーナーのようで、助言者が二人にこやかに席に着いていた。

「この方は、大人になつても実のお母さんと余りうまくいっていないというご相談ですね」

この科白で、私は姿勢を正して画面を見つめた。助言者の他には、同じような母への思いを抱えている女性が二人、アナウンサーの隣に座っている。視聴者の中から選ばれた人だと思われた。

「私はあまり母にはいろいろな相談をしてこなかつたんです。忙しい母に話しても仕方ないと初めから思つてしまつて。進学も結婚も一人で決めました。父がいなかつたものですから。孫が出来たら普通、関係が改善するという話を聞きますが、そんなこともなくて。どうしてかなと。母は私が嫌いなのかと……」

言葉を選びながら、四十歳くらいの人がゆっくりとした口調で話し終えた。もう一人が話し始めた。

「私は母の存在が重くて、息が詰まりそうでした。ごく小さい頃は余り感じてはいなかつたんですが。今、母とうまくいっていないのは、母が私を強く支配しようとした反動ではないかと思ひ始めたんです。何でも私のためと言つて、自分の人生は娘のためにあるみたいでした」

アナウンサーがうまく話をさばいて、二人の体験を細かく聞き出す。助言者はうなずきながらメモをする。私は胸

「思い切つて話し合われるのは、よいことだと思います。時間はかかるかもしれませんが、何と言つても親子ですから。ご相談があればいつでもお聞きします」

助言者がそう言つて、連絡先の電話番号を知らせてから番組は終わった。別に高度成長期の子育てに限つたことではないのだと、伝えたかつた。得体の知れないやり切れないさが、沸々と湧き上がってくる。自分の場合、何か母に言いたくても、既にまともな話が出来る状況ではない。歯ざしりする思いだつた。

4

母がベッドの上で死んでいることに気付かなかつた。一日に何度となく部屋を覗き、一緒にご飯を食べているのに、知らないうちにこんなことが起こるなんて信じられなかつた。十月、過ぎしやすい季節になつて、母の部屋の窓は開け放たれている。それなのに何故か異臭がリビングまで漂つてきて、私は母の元へ急いだ。

白い蠟人形のような母の顔の上でうごめく小さな虫を見つけた時、まだ母は生きていると思つた。その黒い虫を一匹一匹手でつまんで、ごみ箱へ捨てる。捨てれば捨てるほど、虫は加速するようにその数を増していった。それは閉じた目の目頭と目尻の僅かな隙間から湧き出てくる。その

母は惚けながらも、健常な部分で死と向き合っているのだ。突然母を抱きしめたい衝動に駆られて、私は立ち上がった。今ねえ、全然知らない人の家に厄介になっているの。悪い人ではなさそうだけど。時々男の人が遊びに来るし、私を車に乗せてどこかへ隠そうとするし。どうしたらいいと思う？ お父さん。

力なく私は再び椅子に座りなおした。朝日がリビングに差し込んで、電話をしている母の背中当たっている。パジャマの模様の花が、太陽の強い光の中で少しづつ萎れていくのを私はじっと眺めていた。

急に無数の蝶が部屋の中に飛び込んできた。しばらくぐるぐる回ってから、母の周りを囲むように飛び始めた。羽をパタパタと動かし、母の体から付かず離れずいつまでもそうしている。鱗粉が巻き上がり、朝日の中でキラキラと光った。どこからか音楽が流れてきた。讚美歌に似ている。美しいソプラノが部屋を満たしていく。涙を拭いたタオルがテーブルの上にある。夢中でそれを掴み、力任せに振り回して、蝶を追い払おうとした。はずみでそのタオルが母の頭に当たった。

「痛いじゃないか。何をするんだね」

大きな母の声で我に返った。いつの間にか蝶はいなくなり、受話器を持ったまま母は笑顔で私を見ている。

「めぐちゃん、よかった。一緒にいてくれたんだね」



木戸順子

きど じゅんこ

1945年名古屋市生まれ  
 文芸誌「弦」同人  
 中部ペンクラブ理事・編集委員  
 短篇小説集「思秋期」  
 20014年中部ペンクラブ文学賞受賞「シェルターに住む」

うち、鼻の穴からも、耳からも、唇の端からも。剥がれた皮膚の下からも、虫は無数に這い出してきた。みるみるうちに母は虫に覆われて、黒い死体になっていく。もう摘まんで捨てることなど出来ない。一体どこから生まれてくるのだろう。初めの一匹はこの窓から入って来たのか。それとも母の体の奥底に棲みついていたのだろうか。お母さん、お母さん。呼びながら、何とかしたいと思ひながら、体は後ずさりするばかりだった。私がつと気を付ければよかった。涙が後から後から溢れる。その冷たさで目が覚めた。夢だった。よろけるように母の部屋にたどり着く。母はぐっすりとお眠っていた。ベッドライトを点けても、目覚めることはない。顔にも手にも虫など一匹も止まってはいなかった。注意深く床やベッドを点検したが、何も見つからない。

リビングに戻り、立ったまま、流し込むように水を飲んだ。喉がからからだった。どつと疲れが出て、椅子に座りこんだ。どうしてあんな恐ろしい夢を見たのだろう。多分あれはシデ虫に違いない。死出虫。死んだ野生動物にかっっていた黒い虫。娘の凶鑑で見たことがあるのだが、死体に取りついて食べ尽くしてしまうらしい。

夢でよかった。介護疲れで幻覚を見る人があると聞くと、私はそんなに疲労困憊しているのだろうか。いやいや、夢には深層心理が表出すると言いますからね。どこからか男

の冷たい声が聞こえてきた。つまり、思ってもいないことは、決して夢には出てこないということだ。あなたは疲れてなんかいない。雪子さんの存在が疎ましくて、心の中では消えてほしいと思っているんじゃないんですか。

新しい涙が頬を伝った。テーブルに突っ伏して泣いた。自分がこんな精神状態では、もう母を見ることは出来ないかもしれない。夫の言うように、施設へ入ってもらうことを考えた方がいいだろう。しかし、二人の叔母は何と云うだろうか。こんなことを考えているうちも涙は止むことはなかった。しばらくすると、泣き疲れた子供のように寝入ってしまった。

誰かがしゃべっている声で目が覚めた。もしもし、お父さん。母の声だ。私は心身ともにぐったりした気分だ。起き上がるという気力もなかった。ねえ、リハビリに行ったらね、みんなが、死ぬ時はどんな感じがするのかって言うのよ。お父さん、死んだんでしょ。どんな風だったのか教えてください。私の友達が行うことにはね、すごくきれいな音楽が聞こえてくるんだってさ。とても気持ちがいいらしいよ。楽器と女の人の歌声と両方。向こうの方が明るくて、道みたくないものがずっと続いていて、天からキラキラしたものが降ってくるんだって。そういう場合は極楽へ行けるらしい。お父さんもそんな感じだったかどうか聞きたくて、電話したの。

母の顔を見つめたまま、何度も大きく深呼吸をした。

「お母さん……雪子さん」

施設の人の真似をして母を名前と呼んでみた。呼吸と共に何か体が外へと排出され、肩の力が少し抜けていく。母の姿が、いくらか遠ざかった。思いがけないことだった。心を空にして、母との距離を測る。もう、あなたには敵いません、雪子さん。母の目を見つめながら心の中で言った。泣き笑いしている私の顔を、母は不思議そうに眺めていた。

(「弦」96号より転載)